第７章　まとめ

第１節　第１号墳の墳丘について

（1）墳丘の平面形態について

４ヶ年に及ぶ発掘調査の結果、第１号墳の墳丘形態、規模に関する詳細なデータを得ることができた。そこで２次調査で確認されたデータと合わせて第１号墳の墳丘形態、規模について復元を試みたい（註１）。

これまでの調査により墳裾が確認されたのは、後円部で３か所（２次調査７トレンチ、１トレンチ、２トレンチ）、両くびれ部（５トレンチ、６トレンチ）、前方部７か所（２次調査４トレンチ、２次調査10トレンチ、４トレンチ、６トレンチ、９トレンチ、10トレンチ、11トレンチ）である。

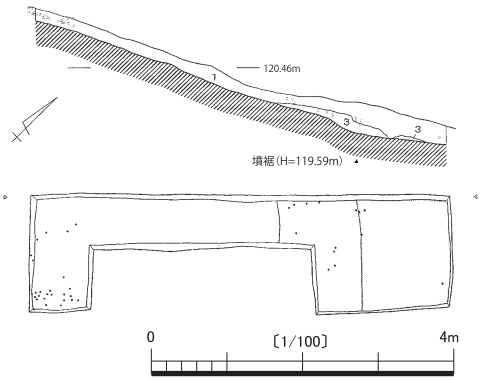
後円部径については、現況地形で正円形をなさない東側の墳裾が明確ではないが、今回確認された後円部西側の墳裾２か所、両くびれ部２か所、後円部北側１か所の墳裾をもとに復元を試みたところ、径52.4 mで概ね整合的な復元が可能となった。これは従来示されていた復元径よりも約1.4 m大きくなる。しかしながら、後円部北側については２次調査７トレンチで確認された墳裾よりも外側に2.5 mほど広がることとなり結果が整合しない。後円部北側は宅地造成に伴い丘陵が削り取られており、さらに調査区を伸ばす余地がないため今回トレンチを延長して確認することができなかったが、当該トレンチでは比較的明瞭な傾斜変換が確認されている。２次調査７トレンチで墳裾とされた標高は119.59 mを測るが（註２）、くびれ部墳裾（５トレンチ：119.7~119,9 m）から後円部西側墳裾（18トレンチ：119.3 m）にかけて緩やかに下がっているため、後円部北側墳裾は７トレンチで確認した墳裾と推定される位置よりも30 ㎝程度低い位置になる可能性があり、さらに外側に広がる可能性が高い。このことから後円部径は、今回復元した52.4 mとするのが妥当と判断した。

問題となるのは後円部東側の墳丘形態である。後円部東側はほぼ正円形を描く西側に比べると、かなり歪な平面形態をなしており、また断面形態をみても西側の墳丘斜面が25度前後の勾配なのに対し、東側は35度から45度のきつい勾配となっており、明確な裾を持たずに約８m下の平坦面まで崖面をなしている。歪な東側の形状について、当初は地すべり等による崩落の可能性が想定された。このことを検討する上で以下の調査結果が得られている。

（ア）後円部東側に設定した３トレンチや７トレンチで行った発掘調査の結果では、地すべり等の痕跡を示す地盤のズレや層の乱れは確認されていない。

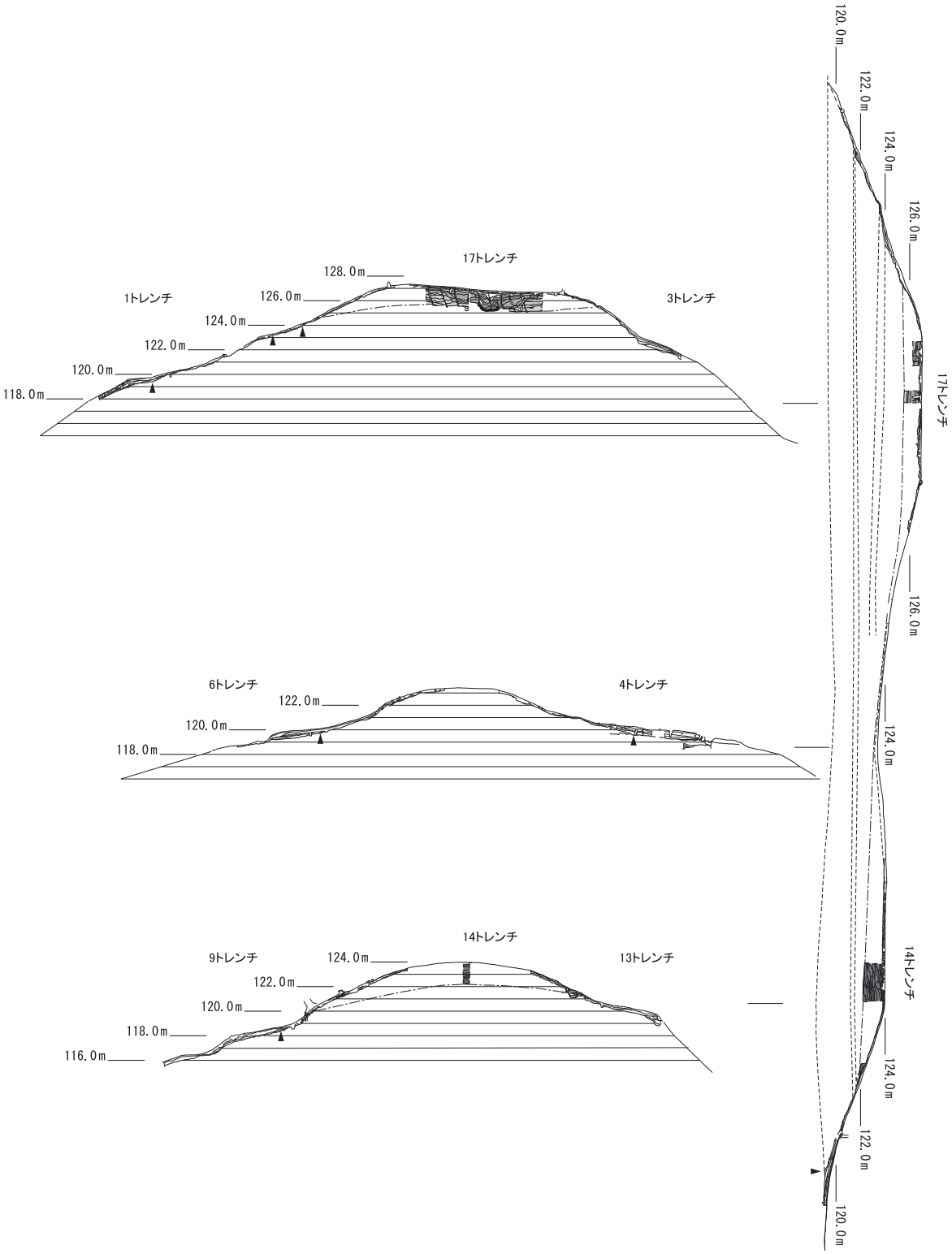
（イ）発掘調査とは別に、１トレンチ及び３トレンチ付近でボーリング調査、簡易動的コーン貫入試験等地質調査を実施したところ、やはり墳丘を大きく改変するような規模の崩落は確認されなかった。

（ウ）墳頂部平坦面に設定した17トレンチでは、墳丘東側が西側に比べて60 ㎝ほど下がる階段状の地すべり痕跡



第76図　２次調査７トレンチ

第 77 図　第１号墳墳丘復元図〔1/500〕



第 78 図　第 1 号墳墳丘エレベーション図〔1/500〕

が確認された。

（ウ）の調査結果から、現状の後円部形状は地すべりの影響を受けていることは否定できない。しかしながら、後円部東側が本来正円形を描くもので、それが現状のようになったとすれば、相当規模の崩落があったと考えなければならず、（ア）、（イ）の調査結果と矛盾する。したがって、左右非対称の後円部形態は、築造当初からのものであり、地すべりの影響は限定されたものと考えられる。宅地造成による切土等を除く現在の周辺地形が古墳築造前のそれを概ね残しているとすれば、丘陵の狭い尾根筋という限られた用地内で、墳丘西側を整美に造り出すことを第一に地割を行った可能性が高いと考えられる。

前方部は、前方部前面で二か所の墳裾を確認しているが、両隅角は流出等により明確な墳裾を確認することはできなかった。確認された二か所の墳裾をつなげると、想定主軸線に直交しないが、前面は盛土であるため、一部流出している可能性も考慮しなければならないだろう。想定主軸線上で前方部長を計測すると、38.9 mを測る。後円部径及び前方部長から、墳丘長は 91.3m となる。

前方部の両側面は後世の削平により失われているが、幸いにも墳裾はかろうじて遺存しており、形態の把握が可能である。現況地形ではくびれ部から細見の前方部が伸び、隅角付近で開くいわゆる撥形を呈しているが、確認された墳裾から、くびれ部幅 24.2 m、前方部前面幅 33 mで、あまり開かずに直線的に伸びる前方部形態を呈することが明らかとなった。

（２）段築について

第１号墳では後円部で３段、前方部で２段が確認されている。まず後円部についてであるが、墳丘西側では３段の段築が概ね良好に確認されたが、墳丘東側では確認できなかった。各段築テラスを復元すると、下段テラスの内縁の復元径が約 39.2 m、中段テラスの内縁が約 29 m、墳頂部平坦面は約 14 mである。下段テラスは前方部段築テラスにつながることがくびれ部で確認されているが、中段テラスは後円部で収束するのか、あるいは前方部墳頂部平坦面へとつながるのかを把握することができなかった。

各段の高さは、下段が後円部で約２m、前方部で約 2.5 m、中段が後円部で約２m、前方部で約２m、上段が約３mを測り、比率を求めれば概ね１：１：1.5 となる。

なお、後円部径とテラスそれぞれの復元径の中心点にはズレが認められる。中心点は下段テラスと中段テ

第 39 表　第１号墳各トレンチ計測値

		後円部							前方部								墳頂部	
		西側		北側			東側		東側			西側			南側			
		1tr	5tr	2tr	7tr	18tr	3tr	8tr	4tr	13tr	12tr	6tr	9tr	10tr	11tr	14tr	15tr	17tr
墳頂部標高 (m)		127.2	-	126.8	-	-	126.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	124.5	127.2
上段斜面角度 (°)		25	25	25.5-27	-	-	-	22	-	-	-	-	-	-	-	-	23	-
中段テラス標高 (m)	上端	123.9	123.3	124	123.9	-	-	-	123	123.2	-	123.2	-	-	-	123.8	123.2	-
	下端	123.2	122.7	123.5	123.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
中段斜面角度 (°)		34	30	30	-	-	-	-	21.5-25	24	-	21.5	24-28	-	-	18	-	-
下段テラス標高 (m)	上端	-	121.9	121.5	-	-	-	(122.9)	-	121.4	-	-	121.7	-	-	121.7	-	-
	下端	-	121.4	121.4	-	-	-	(122.6)	-	121.2	-	-	121.2			121.5		
下段斜面角度 (°)		25	後円部 24 前方部 15	26	35	28	45	後円部 22.5 前方部 27.5	17-20	25-32	10	18-20	30-35	17	15	20	-	-
墳裾標高 (m)		119.4	119.7-119.9	-	-	119.3		119.4-119.9	119.6	-	-	119.7	118.4	118.4	118.8	119	-	-
盛土・地山境標高 ( ) は表面観察		(124.6)	123.7-124	(125.4)	-	-	(125.4)	-		121.4-121.5	118.4-118.6	123.1	119.9-120.6	118.6	118.8	裾付近 119 墳頂部 122.2-122.4	124.2	125.1-125.7

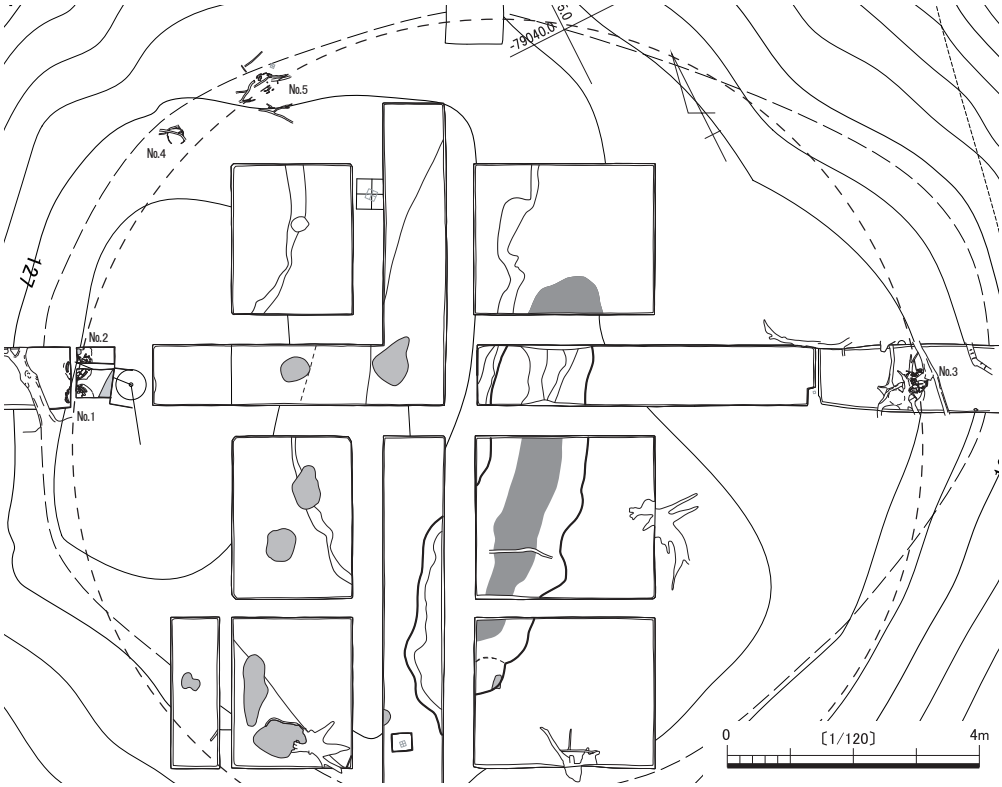
ラスの復元径では南側に向かって移動しているが、墳頂部は墳裾復元径の中心点と概ね一致する。中心点の移動については、墳頂部で水平面を保つために、墳裾における傾斜を徐々に修正したことから生じるいわゆる「0 点の移動」として知られる（北條 1983）。長柄桜山第 1 号墳における後円部北側墳裾と、くびれ部墳裾標高を比較すると、くびれ部側の方が高いことは、「０点の移動」の原理と一致する。ただし、中心点が移動しているにもかかわらず中段テラスや下段テラスでは標高に顕著な差は認められない。

前方部の２段の段築は、削平によりテラスが遺存している箇所は少ないが、後円部下段テラスとほぼ同じ高さでめぐることが確認されている。

（３）外表施設について

第１号墳では、第２号墳にみられたような葺石は確認されていない。ただし、墳丘下半部は風化により白色化した逗子層泥岩層を削り出している上、上半部の墳丘盛土にも削り出した泥岩を多く含むため、築造時には、外観上あたかも葺石が施されていたかのように白く見えたことが想像される。

次に埴輪列だが、第１号墳では後円部墳頂部平坦面の縁辺部上から５個体の埴輪基部が据え置かれた状態で確認されている（第 79 図）。このうち２個体は調査区外で地表に露出したことにより、確認面での必要な記録を取った後埋め戻したため、設置状況は不明である。調査区内で確認した３個体は、表土を除去すると基部まで露出する状態であり、明確な掘方をもって埋設されているとはいいがたく、あたかもその場に据え置かれた状態で確認された。２個体並んで確認されたものは、約 10 ㎝の間隔で設置されていた。段築テラス上でも多くの埴輪が出土しているが、原位置を保ったものはなく、いずれも墳頂部から転落したものが留め置かれた状態で確認されているので、埴輪列はなかったものと考えられる。また、前方部でも埴輪列は確認されなかったが、そもそも前方部での埴輪の出土量は極端に少なく、後円部と同様の間隔で配列された



第 79 図　第１号墳後円部埴輪列〔1/120〕

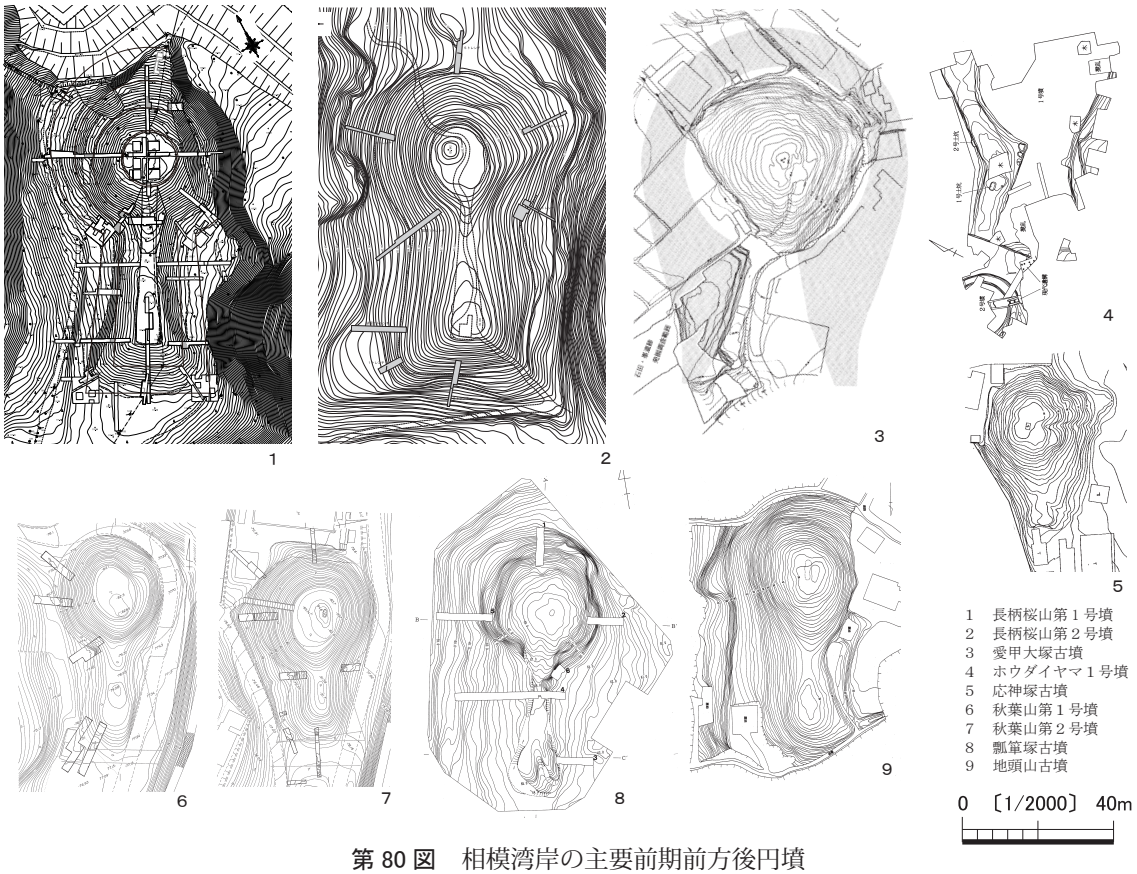
とは到底考え難い。

第１号墳の埴輪列は、後円部を中心とする局所的な配列であったと考えられるが、後円部墳頂部縁辺部に10 ㎝程度の間隔で囲繞配列されていたとすると、少なくともおおよそ 80~90 個体の埴輪が樹立されていたと考えられる。

（４）墳丘規模・形態の比較

第１号墳と第２号墳の墳丘形態を比較すると、墳長が 90 m前後、後円部径が 50 m弱を測ること、後円部径と前方部長の主軸比においては概ね 6:4 である点や、前方部の開き度合いの類似などが挙げられるが、大きくその印象を違えるのはくびれ部幅に対する後円部径の比率であり、第２号墳の前方部が寸胴であるとの印象を与えている。２基の古墳は同規模であることを志向しながらも、墳形に関する規格設計が異なる可能性が高いが、第２号墳についてはなお墳形の詳細、とくにくびれ部の位置が確定していないため、発掘調査をまって検討する必要がある。

次に第１号墳の墳丘規模・形態を周辺地域の主要大形前方後円墳と比較するため、整理したのが第○表である。まず、神奈川県内の前期主要前方後円墳と第１号墳を比較してみると、墳丘規模ではすでに知られる通り第２号墳とともに現存では最大級の規模を誇ることは動かない（註３）。墳丘形態については、発掘調査により墳丘形態が概ね明らかになっている海老名市秋葉山第１号墳、第２号墳および厚木市ホウダイヤマ１号墳と比べると、第１号墳はくびれ部のしまりが弱く、前方部があまり開かない点でその違いが際立つ。厚木市・伊勢原市愛甲大塚古墳（石田車塚古墳）も、復元推定ラインよりももう少しくびれ部幅があったと想定してもよいが、やはり開き気味の前方部をなすと思われる。この差は第２号墳ではさらに顕



第 80 図　相模湾岸の主要前期前方後円墳

第 40 表　長柄桜山古墳群と主要大形前方後円墳墳丘属性比較

	所在地	段築	葺石	埴輪	墳長	後円部径	くびれ部幅	前方部幅	後円部径/墳長	後円部径/くびれ部幅	くびれ部幅/前方部幅	前方部幅/後円部径
長柄・桜山１号墳	神奈川県逗子市三浦郡葉山町	後円部３前方部２	無	円筒・壺形	91.3	52.4	24.2	33	0.57	2.17	0.73	0.63
長柄・桜山２号墳	神奈川県逗子市三浦郡葉山町	不明	有	円筒・壺形	88	54	32	45	0.61	1.69	0.71	0.83
加瀬白山古墳	神奈川県川崎市	不明	不明	不明	87	47 以上	―	37	―	―	―	―
愛甲大塚古墳（石田車塚古墳）	神奈川県厚木市・伊勢原市	不明	無	無	67 以上	48	―	―	―	―	―	―
瓢箪塚古墳（上浜田７号墳）	神奈川県海老名市	後円部２？前方部不明	無	円筒?	71 以上	48	―	―	―	―	―	―
ﾎｳﾀﾞｲ山１号墳	神奈川県厚木市	不明	無	壺形	65	35	13	30	0.54	2.69	0.43	0.86
秋葉山１号墳	神奈川県海老名市	不明	無	無	59	33	10.5	26	0.56	3.14	0.40	0.79
秋葉山２号墳	神奈川県海老名市	無	無	円筒形土製品	50.5	33	12.5	20.5	0.65	2.64	0.61	0.62
大（応）神塚古墳	神奈川県高座郡寒川町	不明	無	不明	51	―	―	―	―	―	―	―
亀甲山古墳	東京都大田区	不明	不明	不明	107.25	66	34.5	49.5	0.62	1.91	0.70	0.75
宝莱山古墳	東京都大田区	後円部３前方部２	無	無	97	52	25.5	38	0.54	2.04	0.67	0.73
姉崎天神山古墳	千葉県市原市	不明	不明	不明	119	68	32.5	55	0.57	2.09	0.59	0.81
今富塚山古墳	千葉県市原市	不明	無	壺形	110	72	24	31	0.65	3.00	0.77	0.43
浅間神社古墳	千葉県君津市	不明	不明	不明	103.1	66.3	38	50	0.64	1.74	0.76	0.75
飯籠塚古墳	千葉県君津市	不明	不明	不明	102	55	―	39	0.54	―	―	0.71
釈迦山古墳	千葉県市原市	後円部２？前方部３？	無	不明	93	57	24.5	32	0.61	2.33	0.77	0.56
油殿１号墳	千葉県長生郡長南町	不明	不明	壺形	93	54.5	15	26	0.59	3.63	0.58	0.48
白山神社古墳	千葉県君津市	不明	不明	不明	88	52	18	40	0.59	2.89	0.45	0.77
しゃくし塚古墳	千葉県香取郡多古町	不明	不明	不明	82	49	20	24	0.60	2.45	0.83	0.49
能満寺古墳	千葉県長生郡長南町	不明	無	壺形	73	43.2	14.5	33.7	0.59	2.98	0.43	0.78
大戸天神台古墳	千葉県佐原市	不明	不明	不明	62	33.5	16.2	22.5	0.54	2.07	0.72	0.67
瀧台古墳	千葉県香取郡干潟町	不明	不明	不明	60.8	37	20.8	26.4	0.61	1.78	0.79	0.71
手古塚古墳	千葉県木更津市	不明	不明	不明	60	35	―	28	0.58	―	―	0.80
日下ヶ塚古墳（常陸鏡塚古墳）	茨城県東茨城郡磯浜町		有	円筒	105.5	60	25	36	0.57	2.40	0.69	0.60
香取神社古墳	茨城県結城郡八千代町	不明	不明	壺形	70	45	―	14.4	0.64	―	―	0.32
三池平古墳	静岡県清水市	２段	有	壺形	67	41	28	35	0.61	1.46	0.80	0.85
岡・銚子塚古墳	山梨県東八代郡八代町	後円部３段前方部２段	有	円筒	92	48	25	41	0.52			0.85
甲斐銚子塚古墳	山梨県東八代郡中道町	後円部３段前方部２段	無	円筒・壺形	169	92	30	68	0.54	3.07	0.44	0.74

著になる。このことは相模川流域ではくびれ部のしまった墳形の志向があったといえるかもしれないが、長柄桜山古墳群の２基にはこうした志向は認められず、墳丘の平面形態について両地域の関係性を読み取ることはできない。

次に県外で房総を中心に周辺の主要大形前方後円墳をみていくこととするが、神奈川県下の古墳も含め、発掘調査により墳丘規模・形態が明らかになっている古墳は少なく、今後数値は大きく変わる可能性があることには留意しなければならない。第１号墳と比率において近似するのは千葉県釈迦山古墳、大戸天神台古墳、茨城県日下ヶ塚古墳（常陸鏡塚古墳）などがあげられる。このうち釈迦山古墳、常陸鏡塚古墳は前方部の改変が著しいこと、大戸天神山古墳も測量図からの復元値であるため、これらが第１号墳と相似形墳であるとは言い切れないが、あまり開かない長めの前方部を有するという特徴は共通する。これらの古墳の間にに何らかのつながりを見出すのは現状では困難であるが、範囲確認調査報告書において後円部径と前方

部長の百分比で指摘されたのと同様、墳丘形態の上では相模との関連性は低く、むしろ房総方面との関連性をもつ可能性がある。

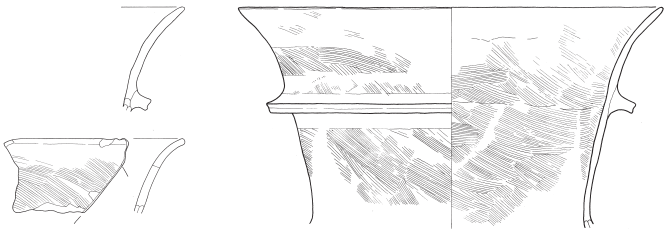
第２節　出土遺物について

（1）　円筒埴輪

長柄桜山古墳群第１号墳から出土した埴輪は、墳頂部平坦面縁辺部に埴輪列として樹立したことが確認されている。ただし、円筒埴輪基部５個体分であり、これらは現状保存としたため取り上げていないので、報告する資料は流土中から出土したものである。出土した埴輪の中で全形が復元可能なものはないため、ここでは各種の属性を整理し、基礎的な検討を加えておきたい。なお、胎土については、肉眼観察では軟質で赤褐色を呈し器面が脆いタイプと、やや軟質で黄橙色を呈するタイプ、比較的硬質でにぶい褐色を呈するタイプがみられるが、前二者は同一個体内で認められる場合があり、前二者は風化の度合いと考えられる。胎土分析では、円筒埴輪、壺形埴輪、土器の破片資料により重鉱物分析、薄片作製観察を行ったが、顕著な差は得られず、基本的に三浦半島内で製作された可能性が高い（註４）。

口　縁　部

口縁部は、突帯まで遺存している資料がきわめて少なく、破片の多くは円筒埴輪か壺形埴輪か判別するのが困難であるが、円筒埴輪であることが確実な例は、突帯から外反して開くもので、短小口縁や受口状の口縁などはみられない。口縁端部はヨコナデが施され丸縁に仕上げられており、面取りを有する個体はない。

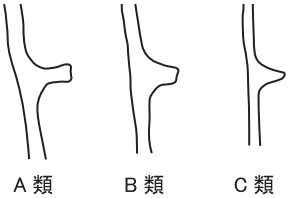


第 81 図　第１号墳円筒埴輪口縁部

口径が分かる個体は１個体のみであり、33.5 ㎝に復元される。口縁部高が分かる個体も２個体のみであり、7.3 ㎝と 7.5 ㎝を測る。

突　帯

突帯は、断面が台形状ないし長方形状で端面がＭ字状をなすもの（Ａ類）、断面が台形状をなし、端面が直線的なもの（Ｂ類）、端面が丸縁で台形状を呈するもの（Ｃ類）がある。出土した突帯はＢ類が主体であり、Ａ類が若干みられる。Ｃ類は少ないが、そもそも摩滅等により端面が失われているものが多く、本来はＢ類である可能性が高い。突帯の上下を強くナデたＡ類は、比較的突帯高が高い傾向にあり、約 1.8 ～ 2.1 ㎝を測る。



第 82 図　突帯の分類

突帯間隔が判明する個体も非常に少なく、２条の突帯が確実に遺存するのは２トレンチ１で、19.6 ㎝を測る。他に５トレンチ１や９が概ね遺存しており、それぞれ 21.5 ㎝、25.9 ㎝と、わずかな資料でもばらつきがあり規格性は低い。

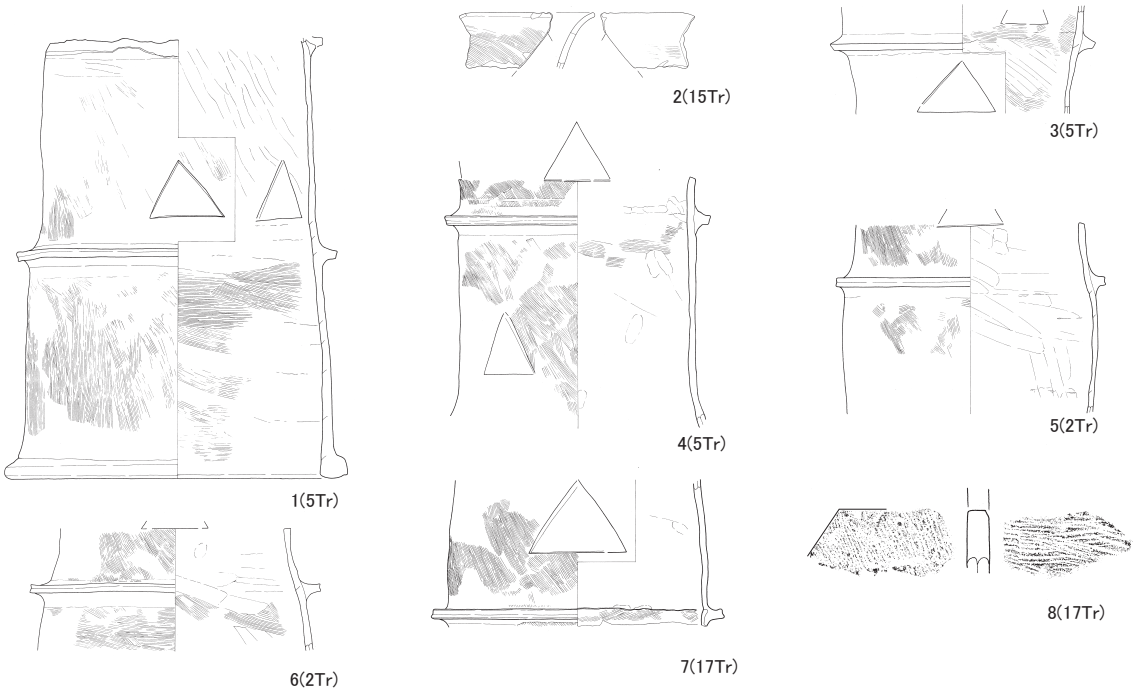
突帯の貼付けのタイミングであるが、突帯貼付箇所の裏面に輪積みの痕跡が残る例が多くみられることはすでに指摘されるとおりである（柏木・依田 2001）。また、突帯下半の破片が脱落状態で出土している事

例がいくつかみられることから、突帯は円筒完成後に割り付けたのではなく、各段製作のたびに付加したものと考えられる。

透孔

透孔の形が分かるものは、すべて正位の三角形であり、逆三角形や方形は１点も発見されていない。１点のみ後円部墳頂部から出土した資料に形状不明の透孔が存在する (17 トレンチ 49）。小破片であるが、鈍角に開く二辺が残存しており、巴形のヴァリエーションの可能性が考えられる（註５）。

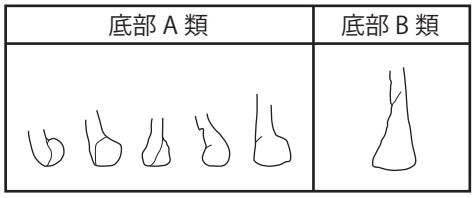
透孔の配置は、第 83 図１は透孔が三孔穿たれており、３や４もその配置から三孔と思われる。１は下段の突帯側に寄せて透かしが三孔穿たれており、上段の突帯側には透孔はみられず、千鳥の配置はとらない。しかしながら、３のように上段突帯側に寄った位置に穿たれたり、４～７は中央付近と思われる位置にあったりと、上下の配置に強い規則性はないようである。透孔は突帯を挟んで２段穿たれている個体が確認されており、底部には透孔はないことから、最低でも突帯は３条存在したものと考えられる。１点のみ口縁部に三角形の透孔を有する２が存在するが、イレギュラーな存在と思われ、口縁部には透孔をもたないのを基本とする。



第 83 図　第１号墳出土円筒埴輪の透孔

底　部

底部形態は、２種に分類される。A 類は底部外面が肥厚するタイプで、丸い粘土紐の上に粘土を積み上げていくか、粘土紐を二重に重ねるなどいくつか製作技法がみられる。後円部墳頂部で確認された埴輪列も底部 A 類であり、ハの字に開く形状などと合わせて、樹立時の安定を保つために意図的に底部を厚くしているものと考えられる。その他わずかではあるが、外面が肥厚しない B 類が存在する。B 類は、後円部西側墳丘斜面の表採品で確認している（第４章第８図）。この個体はハの字に立ち上がるものの、大型品で器壁も厚く、全体のつくりが他とはだいぶ異なる印



第 84 図　円筒埴輪底部の分類

象を受ける。

底径が分かる個体は少ないが、21.0 ㎝、36.0 ㎝、41.0 ㎝、49.4 ㎝とばらつきがある。確認した埴輪列のそれは 40 ㎝前後を測ることから、底径 40 ㎝前後を標準とし、20 ㎝前後の小型品と 50 ㎝近い大型品に分けることができる。

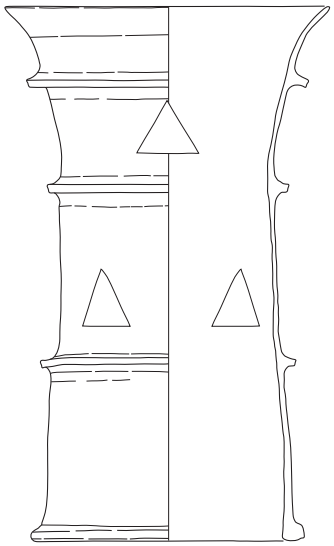
調　整

外面調整はタテハケないしナナメハケ（8 ～ 11 本 / ㎝）が施されており、二次調整は認められない。内面調整はヨコハケないしナナメハケ（8 ～ 11 本 / ㎝）を基本とし、ユビやヘラによるナデ調整も併用されるが、輪積み痕や指頭痕などが顕著に残る個体も多くみられる。

円筒埴輪の形態復元

以上の整理から、長柄桜山第 1 号墳で樹立された埴輪は、口縁部は最上段の突帯から外反すること、三角形の透孔を有する段が少なくとも二段存在すること、突帯 B 類、最下段はハの字形に開き、底部外面が肥厚する底部 A 類を基本とする。第 85 図は、5 トレンチ 1、7、9 を合成して復元した模式図である。二段以上にわたって遺存する個体がわずかしかなく、サイズにはばらつきがあるため、突帯間隔など検討の余地が残り、復元案では口縁部～第 2 突帯間、第 2 ～第 3 突帯間、底部高がそれぞれ 22 ～ 23 ㎝前後の三条四段としたが、四条以上の可能性も否定はできない。

なお、明らかに形態の異なる資料がわずかであるが出土している。5 トレンチ出土 12、22、23 であり、1 条の突帯が確認されるのみであるが、突帯接合部の内面が屈曲し稜線がめぐり、下段は丸みをもっている。朝顔形埴輪の頸部としては幅が広すぎるため、円筒埴輪の一種と思われるが、他のトレンチでは出土がなく、出土した 3 点もあるいは同一個体の可能性が考えられる。



第 85 図　円筒埴輪復元模式図

検　討

神奈川県内で円筒埴輪（朝顔形埴輪）が出土しているのは長柄桜山古墳群を除けば伊勢原市小金塚古墳出土例に限られるが（註 6）、基本的な形態がまず大きく異なる点で系統的なつながりをもつとは言い難い。

東日本で類例を探ると、全体の下半部がハの字に開くという点において、北関東から東関東を中心に分布するいわゆる器台形埴輪との共通性も認められる。茨城県佐自塚古墳出土の器台形埴輪は体部上面に円棒状の粘土を貼り付けて下面から接着用の粘土を付加して作業面をなし、その上に積み上げていく工程を繰り返す粘土付加手法が採用されている（田中新 2008）。基部にも突帯と同様の円棒状の粘土が用いられている点は、第 1 号墳出土の底部 A 類に近似している。突帯下に粘土を付加した際のユビオサエ痕を顕著に残す点も、後述する壺形埴輪有段部と共通する。茨城県長辺寺山古墳でも同様の手法が用いられて製作されているほか、突帯の擬口縁技法として、長野県森将軍塚古墳などでみられる「善光寺平型埴輪」との類似性も指摘されている（柏木・依田 2001）。第 1 号墳出土埴輪では突帯上面を作業面として積み上げていたとまでは言えないものの、円筒埴輪製作の基本的な工程はこれらに類似するといえようか。

こうした共通点を見出すことはできるものの、東日本の前期古墳出土の埴輪は古墳ごとの差異が大きく、系統的な整理はきわめて難しいのが現状である。ただ、これら円筒埴輪の導入にあたっては、埴輪列樹立の

ために多量の埴輪製作を目的としたものであったこと、地域的な変容は認められるものの、透孔や突帯など円筒埴輪としての要件を備えていることから、埴輪製作経験者の指導の下、地域内の土器製作工人を中心に生産体制が組まれたと考えられる。第 1 号墳で出土した円筒埴輪の特徴は三角形の透孔を一段に三孔有し、大きく開いた口縁部など、畿内円筒埴輪編年（埴輪検討会 2003）では I 期に属する古相の内容を有している。しかしながら後述する壺形埴輪や土器の年代観から、第 1 号墳の築造年代を古く遡らせることはできないことから、その円筒埴輪にみられる特徴は、すでに近畿地域ではすたれた特徴を残存させているものと考えられる。このことは埴輪生産にあたって近畿地域から直接工人がかかわった可能性は極めて低いことを示唆している。長柄桜山古墳群では、2 基の古墳で継続的に埴輪が製作、樹立されており、今後 2 号墳における埴輪の様相が明らかになれば、東日本における前期古墳の埴輪生産の実態がつかめる可能性がある。

（2）　壺形埴輪

第 1 号墳からは、円筒埴輪のほかに壺形埴輪がまとまって出土している。全形を復元できる個体がないため、各属性を整理してその特徴に言及する。

口 頸 部

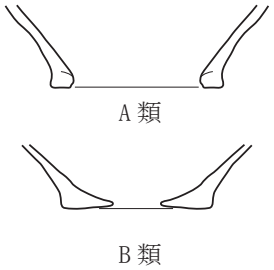
口頸部の形態は、すべて口縁部から頸部がやや緩やかに弧を描きながらラッパ状に開く。比田井克仁氏による二重口縁壺の分類では D 類に相当する（比田井 1995）。有段部は粘土紐を貼付けた後、下からさらに粘土を充填し指で押捺を施している。内面にはほとんど屈曲をもたない。頸部は、古屋紀之氏が有段口縁壺の型式を設定するために用いた長頸率（頸部高 / 頸部下端径）で数値化すると 0.9 ～ 1.0 となり、他の例と比較すると長頸の範疇に十分入る。調整は口縁部は内外面ともにヨコハケを施す点で共通しているが、頸部はナデ調整を主体としながらもナナメハケ顕著に残す個体も認められる。形態的にも段部の作出方法にも個体間の差異の幅は狭く、規格性が高いということができる。

胴 部

胴部はやや長胴気味で、肩部の張りは弱い。底部から 7 ～ 8 ㎝の高さまで積み上げて一旦半乾燥の工程を置いた後、上半を積み上げられており、内外面に稜線が残る。胴部最大径は 28 ～ 30 ㎝を測り、サイズの規格性も高い。調整はハケ調整及びナデ調整を基本とし、胴部は比較的粗いハケ（6 本 / ㎝）が用いられている。

底 部

底部は粘土紐を輪状につくり、そのまま積み上げていくいわゆる開口底部であり、大きく 2 種に分類できる。A 類は粘土紐を輪状につくりそのまま粘土を積み上げていくタイプであり、主体となる。B 類は底部中央に向かって粘土が薄くなり、中央部分に小孔が認められるタイプである。穿孔を施したのではなく、おそらく A 類同様粘土紐を輪状につくった後、底部中央に向かって粘土を押し広げて中央部分のみ小孔を残したのものと思われる。したがって、焼成前、焼成後を問わず、壺形埴輪の中に穿孔を施す個体は 1 点も認められない。



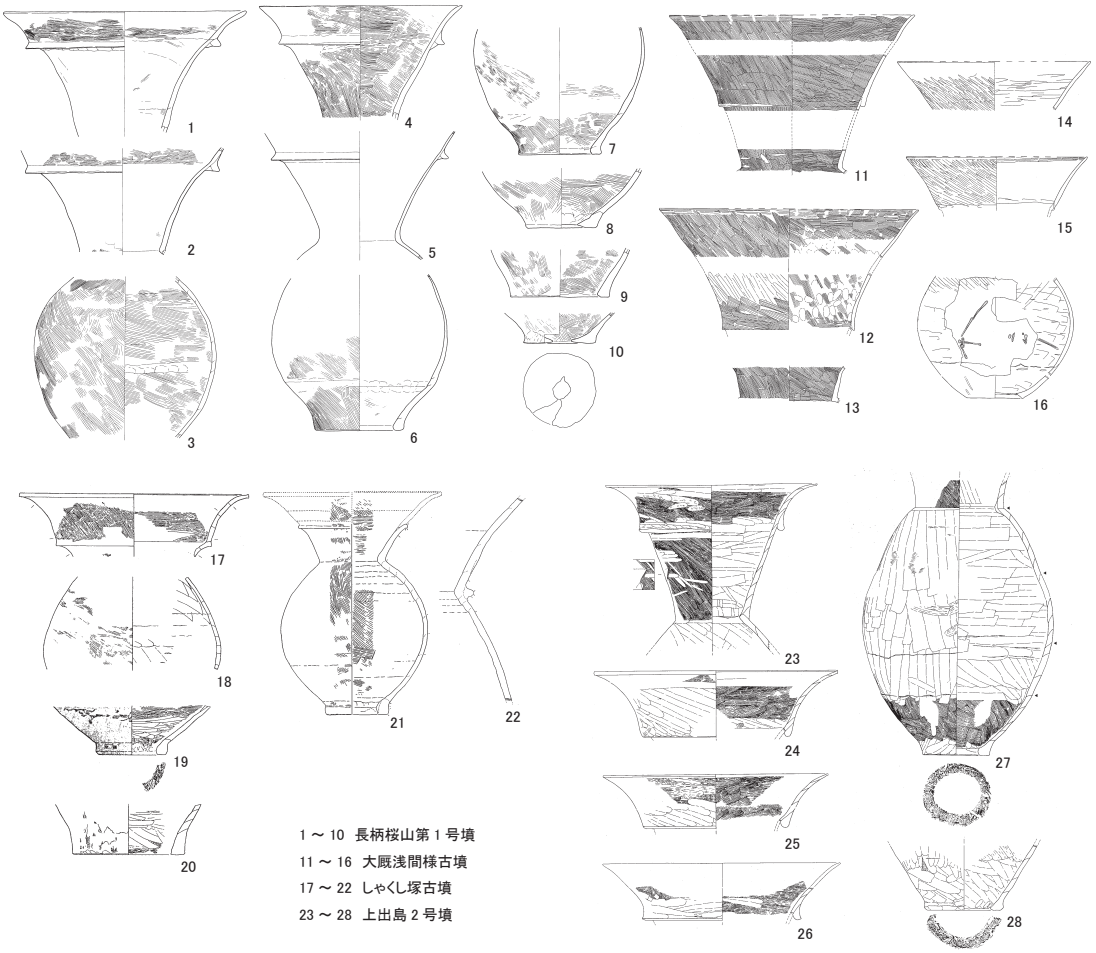
第 86 図　壺形埴輪底部分類図

検　討

第 1 号墳出土の壺形埴輪の特徴をまとめると、長頸、長胴、開口底部であり、時期的な検討を行う上で

指標となる。底部穿孔壺、壺形埴輪については諸氏の研究の蓄積があり（塩谷 1992、比田井 1995、古屋 1998、田中新 2002、青山 2004、田中裕 2005）、時間的変遷を示すであろういくつかの属性が抽出されている。その中で、長頸、長胴、開口底部は、時間的変遷として新しい属性として評価されており、前期後葉～中期初頭に位置づけられている。

類例は、千葉県市原市大厩浅間様古墳、香取郡多古町しゃくし塚古墳、茨城県坂東市（旧岩井市）上出島 2 号墳などがあげられる。大厩浅間様古墳では、大形の口縁部を有する壺形埴輪が出土しており、有段部の内面には稜をもたない。底部は焼成前に切り取られている。しゃくし塚古墳では採集資料が報告されているが、有段部内面に稜を有する大形のものと、段部内面に稜をもたないものの両者がみられる。底部は開口底部であるが、内底面に仕上げのケズリを加えたものが存在する。上出島 2 号墳出土の壺形埴輪は、有段部内面の屈曲はほとんどもたず、長頸である。長胴をなし、底部は開口底部である。第 1 号墳出土の壺形埴輪は、細部でいずれとも違いが認められるが、有段部内面に屈曲をほとんどもたないことや長頸であること、開口底部をなす点など上出島 2 号墳出土の壺形埴輪と近い様相を示す。上出島 2 号墳は墳頂部粘土槨出土の副葬品の検討から、古墳時代前期後葉に位置づけられており、長柄桜山第 1 号墳例もおおよそ同時

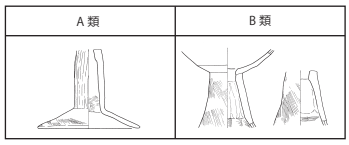


第 87 図　長柄桜山第 1 号墳の壺形埴輪と類例

期と考えられる。

（３）　土　器

第１号墳では墳頂部の埋葬施設陥没坑脇から土器がまとまって出土している。高坏・器台９個体以上、壺が６個体以上出土しており、いずれも破片であり完形に復元できる個体はないが、本墳の時期を知る手がかりとなる。



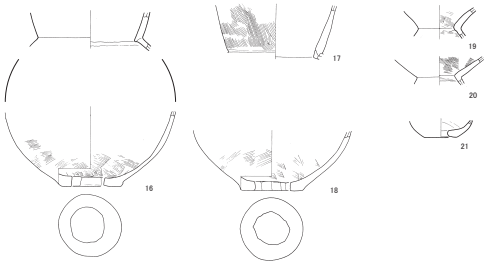
第 88 図　高坏の分類（1/8）

高坏は、中空柱状の脚部で裾が屈折して開くＡ類、中空でややハの字に開くＢ類に分けられる。Ｂ類は裾部の形状が不明であるが、屈曲して開くタイプである可能性が高い。Ａ類はタテヘラミガキと赤彩が施されており、Ｂ類は外面にハケを残し、赤彩も認められないが、いずれも胎土等に違いは認められず、精製品ではない。

第 89 図　異形器台と類例

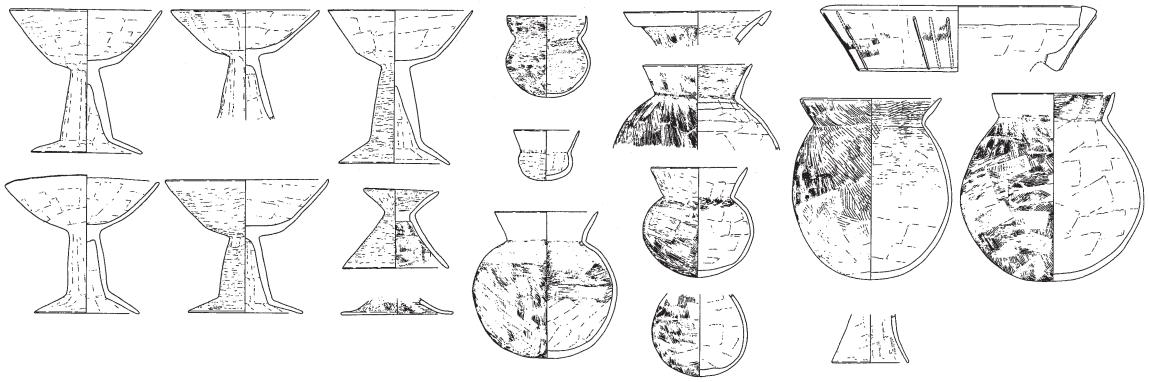
器台は、坏部内面の穿孔部周囲に返しを有する特異な形状をなすタイプである。逗子市持田遺跡から、穿孔はないものの同様の返しを有する器台が出土している。

壺は、中形と小形の壺が出土している。中形の壺は、口縁部が出土していないが、直口壺と思われる。発見された底部はヘラにより焼成前の穿孔が行われている。小形の壺は、頸部と底部が出土している。小型丸底壺あるいはＸ字形の器台の可能性もあるが、調整やつくりが粗雑であり、精製品ではない。



第 90 図　第１号墳出土壺類

これらの土器群の一括性について確実な保証はないものの、埋葬施設は１基のみであり、土器は儀礼後に墳頂部に遺棄されたものと思われ、時期差を見込む必要性は低いと考える。焼成前穿孔が施されている点など埋葬儀礼用に製作された可能性が高いが、当該期の集落遺跡から出土するものと基本的には変わらないものと考える。出土した土器群の中で高坏Ａ類は、集落遺跡において前期中葉から末葉にかけてみられるタイプである。高坏Ｂ類も裾部は遺存していないが、屈曲する裾部を有する可能性が高く、ハの字に開く点やミガキが省略されているなど、Ａ類よりもさらに後出する要素をもつ。三浦半島内相模湾側の集落遺跡である長井内原遺跡の土器編年に照らし合わせれば、長井Ⅱ段階とⅢ段階の間に位置すると考えられ、第１



第 91 図　池子遺跡群№４地点９号住居跡出土土器

号墳出土土器とほぼ同時期の資料に池子遺跡群№４地点９号住居跡出土土器があげられよう（小出・大塚他 1982、長谷川他 1998、西川 1999）。次の段階にはいわゆる和泉式、古墳時代中期段階の土器様相と考えられることから、土器様相からも古墳時代前期末葉に位置づけることが可能である。

第３節　総括

（１）　第１号墳の調査成果

今回の調査により、長柄桜山古墳群のうち、第１号墳の墳丘構造、埋葬施設の位置など多くのことが明らかとなった。最後に得られた成果を整理し、古墳群築造の意義について触れておきたい。

今回の調査により、確認可能な墳裾の位置は概ね確定することができた。その結果、墳長 91.3 mを測る前方後円墳であることが明らかとなった。前方部側面は後世の削平を受けていたが、墳裾は残存しており、その結果あまり開かずやや長めの特徴をもつことも範囲確認調査の結果を追認したといえよう。今回の調査で重要な点は、墳丘が左右非対称をなす点について、基本的に築造当初からの地形とした点である。従来墳丘東側は急斜面となっていることから、非対称の原因について地すべり等の崩落が想定されていた。確かに発掘調査により墳頂部平坦面における階段状の地すべり痕跡も確認されてはいる。しかしながら地質調査等の結果では墳丘を大きく改変する地すべりがあったとはいいがたく、最終的に築造当時の地形を残すものと判断した。墳丘には後円部３段、前方部２段の段築が確認された。ただし段築も後円部東側では確認されておらず、墳形同様左右非対称をなす。

墳丘の構築は、基本的に地山を削り出して構築しており、その上に約 1.5 mの盛土を施していることが確認された。なお、前方部前面のみ地山を大きく削り出した後、断面三角形状の盛土を施し、墳丘の斜面下半部を作り出していることが確認された。

後円部墳頂部縁辺には、埴輪列が樹立されていることが明らかとなった。前方部墳頂部や段築テラス上には埴輪列の存在が確認されず、後円部を中心とする局所的な配列の可能性が想定された。

後円部墳頂部中央からは長さ７ m、幅約 1.6 mの陥没坑が確認され、一部盛土の断ち割り調査を実施した結果、墳頂部から約 1.0 m下から粘土槨と考えられる被覆粘土を検出し、後円部には１基の埋葬施設が未盗掘の状態で存在することが確認された。

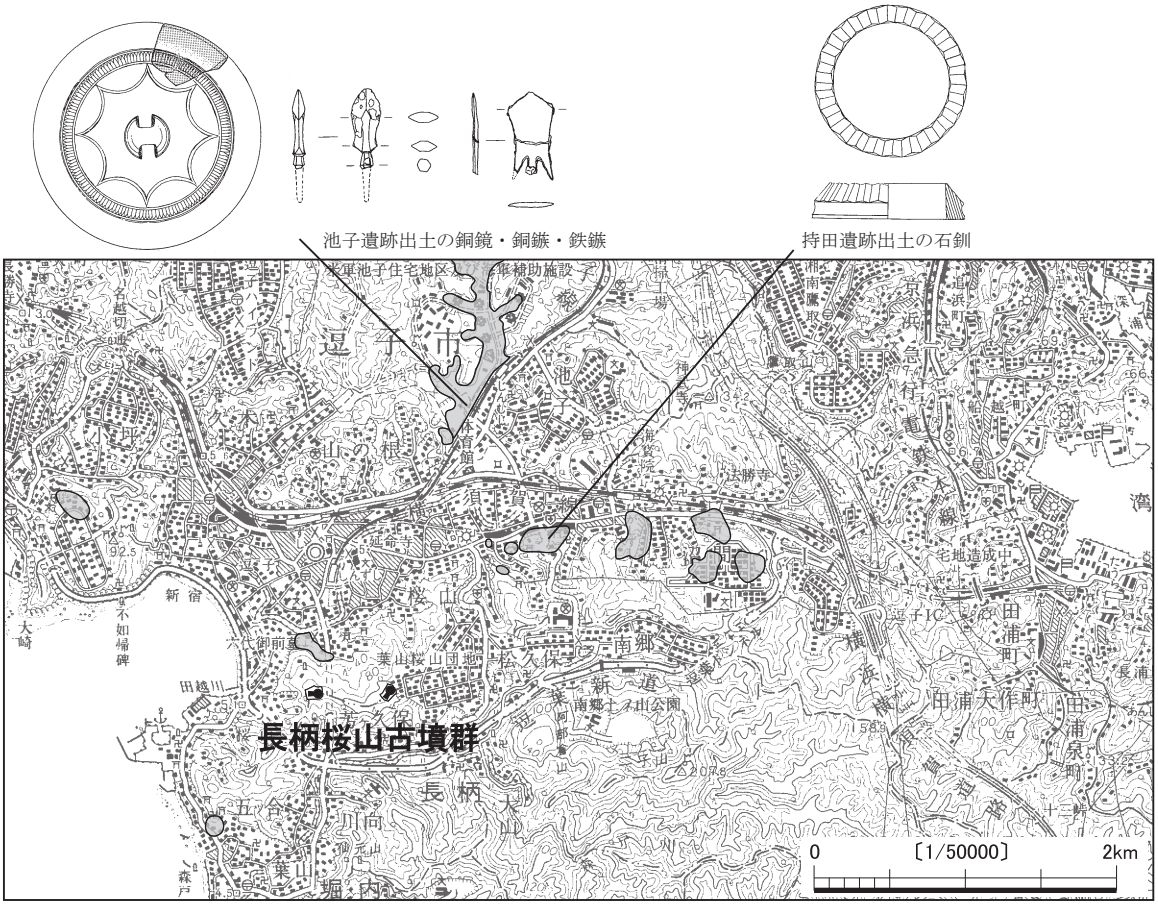
この陥没坑脇の墳丘面上から、焼成前穿孔を施した壺や高坏などの土器がまとまって出土しており、埋葬儀礼に使用され、遺棄されたものと考えられる。

円筒埴輪、壺形埴輪、及び土器が出土したことから、第１号墳の築造年代を絞り込むことができる。第１号墳で出土した円筒埴輪は地域的な個性が強く、当該期の畿内円筒埴輪編年上で位置づけることは困難であるが、東日本において比較的多く出土し編年的検討の蓄積がある壺形埴輪は、長頸、長胴、開口底部などの特徴から、古墳時代前期後葉から末葉に位置づけることが可能である。また、土器、とくに柱状屈折脚高坏の脚部が出土し、その特徴から壺形埴輪と同じく古墳時代前期後葉から末葉に位置づけることが妥当と判断される。前期古墳の実年代についてはなお流動的であるが、現時点では４世紀後葉としておくのが穏当であろう。

（２）長柄桜山古墳群築造の意義について

第２章第１節でふれたように、第１号墳からは田越川に開析された沖積低地及び逗子湾を、さらに東京湾の眺望が可能であり、また第２号墳からは相模湾を眺望することができ、長柄桜山古墳群は眺望を意識して築かれた古墳であるといえる。今回の調査で第１号墳は、逗子側の沖積低地や逗子湾側が眺望できる墳丘西側を整美に見せるよう築造していたことが明らかになった。墳丘西側には正円形を描く後円部に三段の段築を巡らせる一方で、丘陵地形にあわせて歪な形状をなす東側には段築の造成も認められないのである。墳丘西側を意識して築造した背景は何であったのか。長柄桜山古墳群周辺の同時期の遺跡の展開状況をみると、丘陵北側の田越川中上流域に池子遺跡群や持田遺跡など、濃密な遺跡の分布が認められる。池子遺跡群では銅鏃や鏡、持田遺跡では石釧が出土しており、一般集落では稀な当時の高価値財を保有していることから、古墳群の築造母胎は田越川中上流域の遺跡群であった可能性が濃厚である。これらの遺跡が高価値財を保有するに至ったのは、当該エリアの地理的特性と無関係ではない。相模湾と東京湾を画する三浦半島は、付け根付近の逗子湾から長浦湾を結ぶ東西間で約 5.3 ㎞でくびれており、両湾を最短で抜けることができるルートがまさにこのエリアに存在していたことが想定される。田越川中上流域の遺跡群は、相模湾と東京湾をつなぐ物資流通の拠点に展開したのであり、その恩恵に与って石釧をはじめとした高価値財を入手したのであろう。

一方幅丘陵南側の森戸川によって開析された狭い沖積低地には現在のところ当該期の遺跡は見つかっておらず、アブズル遺跡（葉山町№２遺跡）や三ヶ岡遺跡、御用邸内遺跡など、むしろ相模湾に面した砂堆や台



第 92 図　長柄桜山古墳群と周辺の遺跡

地上に点々と展開している。さらにその先には古墳時代前期における三浦半島屈指の大規模集落遺跡である内原遺跡を擁する長井遺跡群が展開しており、これらの遺跡間を結ぶ海上交通ルートが存在した可能性が想定される。長柄桜山古墳群は、相模湾、東京湾を結ぶルートと三浦半島を南下するルートの二つの交通路の結節点と呼ぶべき位置に築造されたといえよう。ただ、注意しておかねばならないのは、古墳の築造母胎と想定した田越川中上流域の遺跡群からは、古墳を望むことができる場所はほとんどないことである。このことは、古墳は居住地から常に仰ぎ見る権力の象徴としてではなく、当時の主要幹線路から望むランドマークとして築かれたことを物語る（西川 1991）。古墳時代前期においては水上交通が重視され、それが首長の基盤となったとするならば（田中裕 2012）、長柄桜山の 2 基の古墳被葬者の存立基盤はまさにこの地域の交通を掌握したことにあったといえよう。

（3）おわりに

今回の調査は、今後古墳群を史跡として恒久的に保存していくための整備に向けて行ったものであり、必要最小限の限られた調査ではあったが、従来知られていなかった長柄桜山古墳群の一端を明らかにすることができた。逗子市と葉山町では、今後史跡整備を実施して後世への確実な保存を図ると同時に、かつて人々の往来のシンボルとして機能したであろう長柄桜山古墳群が、現代においても人々が集い、憩う場所になることを目指して活用に努めていく所存である。今回の成果が調査研究の進展に寄与するものとなることを期待して本書のむすびとしたい。

註

（註 1）主軸方位については、2 次調査（範囲確認調査）報告書で示された数値と大きく異なる。これは前回測量調査時における国土座標との結合の際の誤りであることを確認したため、今回訂正した数値を掲載した。

（註 2）範囲確認調査報告書に記載された第 1 号墳 7 トレンチの標高数値について訂正する。記載では墳裾の標高が 122.13 mとなっているが、原図を確認した結果、標高 119.59 mに改める。また、後円部墳頂部の比高差が同データにより算出された結果 5.12 mとなっているが、7.66 mに修正する。

（註 3）安藤広道氏は、戦前の土取り工事により墳丘が失われている横浜市観音松古墳について、旧地形図や周辺の発掘調査の結果、他の古墳との比較に基づき、墳長が 101 m、後円部径 55 mに復元されている。

（註 4）重鉱物分析では 1 点（H2) 組成が異なることが指摘されたが、分析資料は、他と比べて黒色粒子を多量に含む特徴をもっていることから資料として選択した大形の壺の胴部片である。壺なのか壺形埴輪なのかは不明である。

（註 5）車崎正彦氏教示。

（註 6）海老名市瓢箪塚古墳（上浜田 7 号墳）から「埴輪」が出土しているが、透孔、突帯が確認されないことなどから、同市秋葉山第 2 号墳で出土した円筒形土製品との類似が指摘されている（押方他 2000）。

引用・参考文献

青山博樹 2004「底部穿孔壺の思想」『日本考古学』第 18 号　有限責任中間法人日本考古学協会

赤星直忠・岡本勇他 1975「持田遺跡発掘調査報告　本文編」『逗子市文化財調査報告書』第六集　逗子市教育委員会

浅利幸一他 1999『市原市大厩浅間様古墳調査報告書』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 42 集　財団法人市原市文化財センター

阿部友寿・飯塚美保他 2004「桜山うつき野遺跡」『財団法人かながわ考古学財団調査報告』163 財団法人かながわ考古学財団

上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡（逗子市№ 100）』東国歴史考古学研究所

押方みはる他　2002　『秋葉山古墳群第１・２・３号墳発掘調査報告書―第５～９次調査―』海老名市教育委員会
柏木善治・依田亮一 2001『長柄・桜山第１・２号墳　測量調査・範囲確認調査報告書』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
鐘方正樹 2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第４号　埴輪検討会
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号　日本考古学会
佐藤仁彦他 2002『埋蔵文化財発掘調査報告書』２　逗子市教育委員会
神奈川県考古学会 2998『考古学入門講座　神奈川の古墳－その出現と展開－』神奈川県考古学会
菊池信吾・佐藤仁彦 2007『埋蔵文化財緊急調査報告書』５－平成 15 年度・平成 16 年度・平成 17 年度－　逗子市教育委員会
菊池信吾 2009『埋蔵文化財緊急調査報告書』６－平成 18 年度・平成 19 年度－　逗子市教育委員会
菊池信吾 2011『埋蔵文化財緊急調査報告書』７－平成 20 年度・平成 21 年度－　逗子市教育委員会
木幡成雄他 2009「県指定史跡玉山古墳　東北地方南部における前方後円墳の調査」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第 135 冊　財団法人いわき市教育文化事業団
車崎正彦 1998「埴輪からみた前期古墳から中期古墳へ」『第３回東北・関東前方後円墳研究会大会　シンポジウム前期古墳から中期古墳へ』発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会
小出義治・大塚真弘他 1982「長井内原遺跡」　『横須賀市文化財調査報告書』(9)　横須賀市教育委員会
佐藤仁彦・山口正憲 2009『国指定史跡長柄桜山古墳群第１号墳発掘調査概要報告書（平成 18 年度～平成 20 年度）』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
塩谷修 1992「壺形埴輪の性格」『博古研究』第３号　博古研究会
逗子市　1987『逗子市史別編Ⅰ自然編』
逗子市教育委員会・葉山町教育委員会 2011『国指定史跡長柄桜山古墳群整備基本計画書』
逗子市教育委員会・葉山町教育委員会 2004『シンポジウム前期古墳を考える～長柄・桜山の地から～／国史跡指定記念講演会　未来に活かす史跡整備を考える　記録集』
高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第 41 巻第２号　考古学研究会
田中新史 2008「点景をつなぐ－古墳踏査学による常総式古式古墳の理解－」『土筆』第 10 号　土筆舎
田中裕 2005「壺形埴輪と東関東の前期古墳―土師器とは異なる壺形埴輪の周知とその系譜―」『千葉県文化財センター研究紀要』24　財団法人千葉県文化財センター
田中裕 2012「古墳と水上交通―茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して―」『第 17 回東北・関東前方後円墳研究シンポジウム　東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク　発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会
千葉県文化財センター 2001『研究紀要』21 房総地方における前期古墳の展開　財団法人千葉県文化財センター
長柄・桜山古墳をまもる会 2007『よみがえれ 1600 年！長柄桜山古墳群－発見からのあゆみ－』
西川修一 1991「弥生の路・古墳の路－神奈川の場合」『古代』第 92 号　早稲田大学考古学会
西川修一　1999　「古墳前・中期の境界の土器様相をめぐる諸問題」『東国土器研究』第５号　東国土器研究会
西川修一 2007「相模の首長墓系列」『武蔵と相模の古墳』『季刊考古学別冊』15　雄山閣
萩　悦久 1993「千葉県多古町しゃくし塚古墳の有段口縁壺」『古代』第 96 号　早稲田大学考古学会
長谷川厚他 1998「池子遺跡群№３地点・４地点・№ 11 地点」『かながわ考古学財団調査報告』44　かながわ考古学財団
比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」『古代』第 100 号　早稲田大学考古学会
日高慎・田中裕 1996「上出島２号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市史編さん委員会
平本元一 1999「厚木市ホウダイヤマ遺跡」『第 23 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』　神奈川県考古学会・伊勢原市教育委員会
広瀬和雄 2007「相模の二つの古墳群－秋葉山古墳群と長柄・桜山古墳群－」『武蔵と相模の古墳』『季刊考古学別冊』15　雄山閣
藤沢市教育委員会 1997『神奈川の古代道－博物館建設準備調査報告書第３集－』藤沢市教育委員会

古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義―東日本の古墳時代の開始―」『駿台史学』第 104 号　駿台史学会

古屋紀之 2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣

文化庁文化財部記念物課 2005『史跡等整備のてびき－保存と活用のために－』同成社

北條芳隆 1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価―成立当初の畿内と吉備の対比から―」『考古学研究』第 32 巻第 4 号　考古学研究会

北條芳隆 2007「前方後円墳の展開と相模国」『シンポジウム古墳時代の始まりと足柄平野』発表要旨　小田原市教育委員会枡

渕規彰他 2000「逗子市・葉山町　長柄・桜山第 2 号墳の試掘調査」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』42 神奈川県教育委員会

柳沼賢治 1998『大安場古墳群－第 2 次発掘調査報告－』郡山市教育委員会

横須賀市 2010『新横須賀市史』別編考古

若松美智子 1999『葉山町№2 遺跡発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所

第 41 表　長柄桜山第 1 号墳墳丘計測表

	墳丘計測値（2012 現在）	範囲確認調査計測値（2001 年）
軸方位	N-27°　43′　30″ -E	N-62－-E
墳丘長 (m)	91.3 m	90 m（推定線間）
後円部径 (m)	52.4 m	51 m
後円部墳頂部平坦面径 (m)	13.5 m	南北 16、東西 17
後円部高 (m)	7.8 m	
前方部長 (m)	38.9 m	39 m
前方部前面幅 (m)	33.0 m	31.5 m
前方部高 (m)	4.8 m	
くびれ部幅 (m)	24.2 m	25.5 m
墳頂間比高差 (m)	3.4 m	3.25 m
後円部径と前方部長の主軸百分比	57：43	57：43
前方部前面幅に占めるくびれ部幅の割合	73%	81%
後円部径に占める前方部前面幅の割合	63%	62%

図 版 1

1　史跡遠景（北から）

2　第 1 号墳全景（西から）

図 版 2

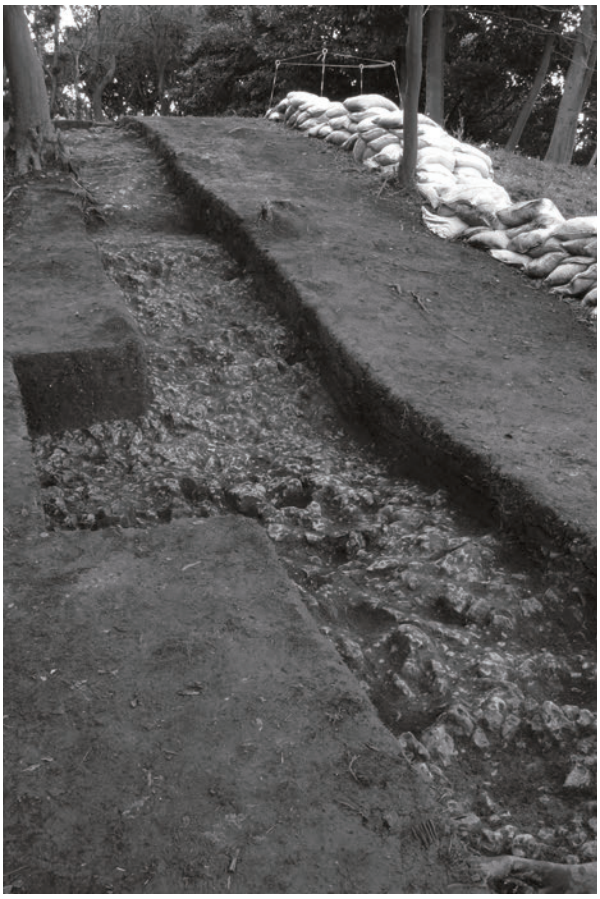
1　1トレンチ　全景（東から）

2　1トレンチ　後円部西側墳裾　（北東から）

3　1トレンチ　後円部墳頂部埴輪列（北から）

4　1トレンチ　墳頂部埴輪列検出状況（北東から）

1　2トレンチ　全景（北東から）



2　2トレンチ　中段テラス（北東から）

3　2トレンチ　段築確認状況（北から）

4　2トレンチ　中段テラス遺物検出状況１（北西から）

5　2トレンチ　中段テラス遺物検出状況２（北から）

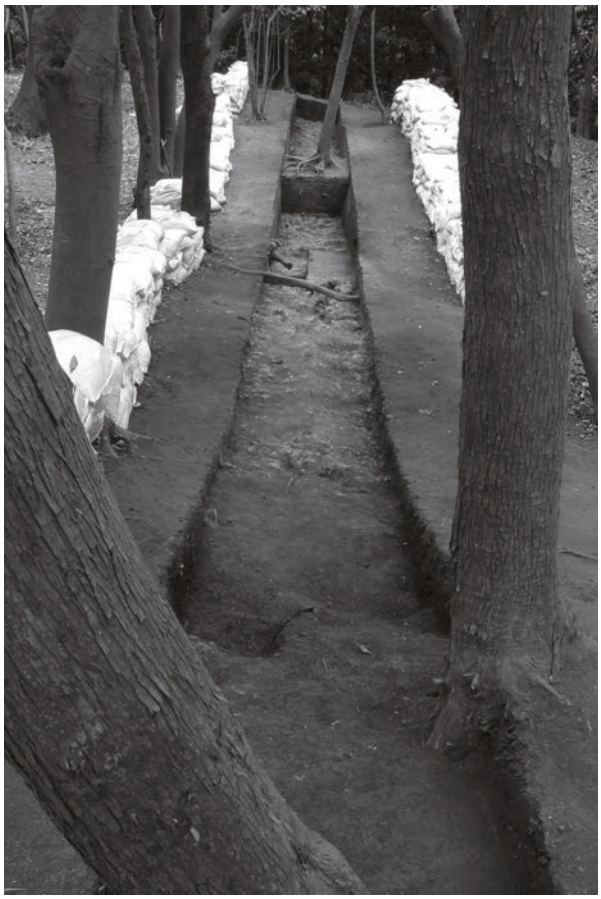
図 版 4

1　3トレンチ　全景（南東から）

2　3トレンチ　土層堆積状況　（東から）

3　3トレンチ　遺物検出状況（南東から）

4　3トレンチ　墳頂部埴輪列検出状況　（南から）



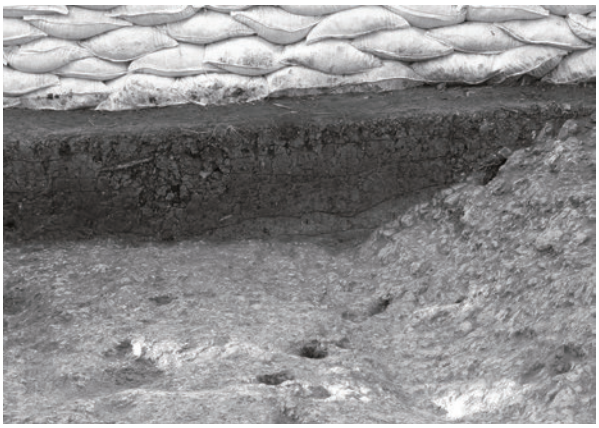
5　4トレンチ　全景（北西から）

6　4トレンチ　全景（南東から）

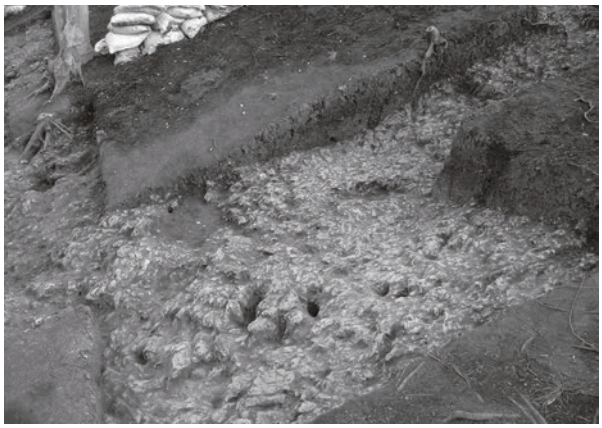
7　4トレンチ　墳裾検出状況（南から）

1　5トレンチ　全景（南西から）

2　5トレンチ　くびれ部墳裾（南から）



3　5トレンチ　墳裾土層堆積状況（南から）



4　5トレンチ　段築下段テラス（南から）

5　5トレンチ　段築中段テラス（南東から）

図 版 6

1　5トレンチ　遺物出土状況１（西から）

2　5トレンチ　墳裾検出状況２（東から）

1　5トレンチ　墳裾遺物出土状況１（西から）

2　5トレンチ　墳裾遺物出土状況２（北から）

3　5トレンチ　中段テラス遺物出土状況１（南から）

4　5トレンチ　中段テラス遺物出土状況２（北から）

5　6トレンチ　全景（北西から）

6　6トレンチ　墳丘盛土検出状況（西から）

7　6トレンチ　遺物出土状況（北西から）

図 版 8

1　7トレンチ　全景（南東から）

2　7トレンチ　中段テラス（北東から）

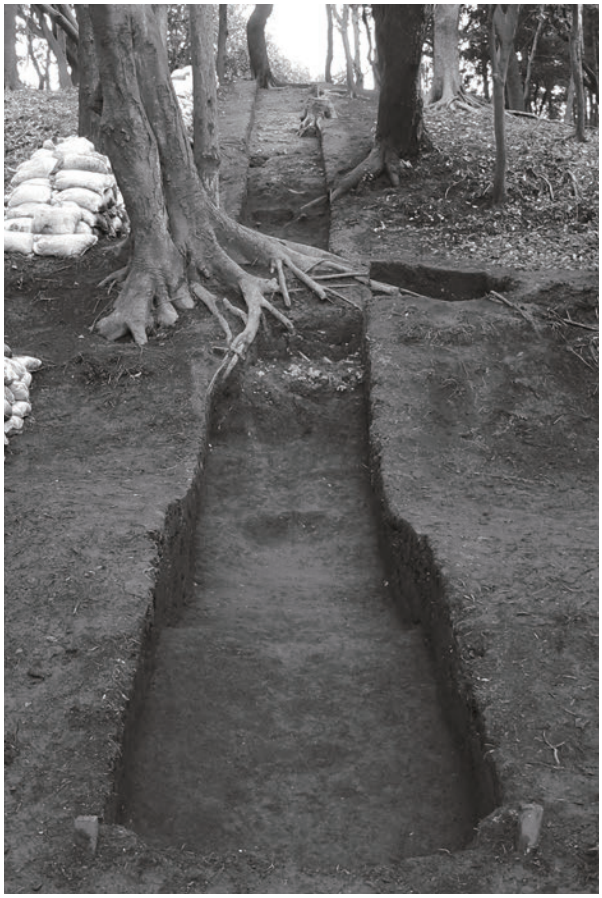
3　7トレンチ　中段テラス遺物出土状況１（北東から）

4　7トレンチ　中段テラス遺物出土状況２（南東から）

5　8トレンチ　全景（南西から）

1　8トレンチ　墳丘検出状況（南東から）

2　8トレンチ　遺物出土状況（南西から）



3　9トレンチ　全景（北西から）

4　9トレンチ　墳裾検出状況（南西から）

5　9トレンチ　墳裾西側傾斜地形（南東から）

6　10トレンチ　全景（北西から）

7　10トレンチ　墳丘盛土検出状況（西から）

図 版 10

1　10 トレンチ　2 次調査断ち割り状況（北から）

2　11 トレンチ　全景（北東から）

3　11 トレンチ　墳丘盛土断ち割り状況（北西から）

4　12 トレンチ　全景（南から）

5　12 トレンチ　墳丘断ち割り状況（南西から）

6　12 トレンチ　土層堆積状況（南東から）

7　13 トレンチ　全景（南東から）

1　13 トレンチ　段築テラス 1（東から）

2　13 トレンチ　段築テラス 2（北西から）

3　13 トレンチ　墳裾断ち割り状況（北東から）

4　13 トレンチ　土坑検出状況（北東から）

5　14 トレンチ　全景（南西から）

図 版 12

1　14 トレンチ　全景（南西から）

2　14 トレンチ　墳裾検出状況　（南東から）

3　14 トレンチ　墳丘盛土検出状況（北西から）

4　14 トレンチ　墳頂部検出状況 1　（北から）

5　14 トレンチ　墳頂部検出状況 2（南西から）

6　14 トレンチ　段築テラス検出状況（南東から）

7　14 トレンチ　テラス付近盛土断ち割り状況（南西から）

8　14 トレンチ　前方部墳頂部盛土断ち割り状況（南西から）

1　14 トレンチ　前方部墳頂部盛土（南から）

2　15 トレンチ　全景（北東から）

3　15 トレンチ　隆起斜道検出状況（南から）

4　15 トレンチ　西側段築中段テラス（南西から）

5　15 トレンチ　東側墳丘斜面（東から）

図 版 14

1　15 トレンチ　遺物出土状況 1（西から）

2　15 トレンチ　遺物出土状況 2（南西から）

3　16 トレンチ　全景（北東から）

4　16 トレンチ　墳裾西側傾斜地形（西から）

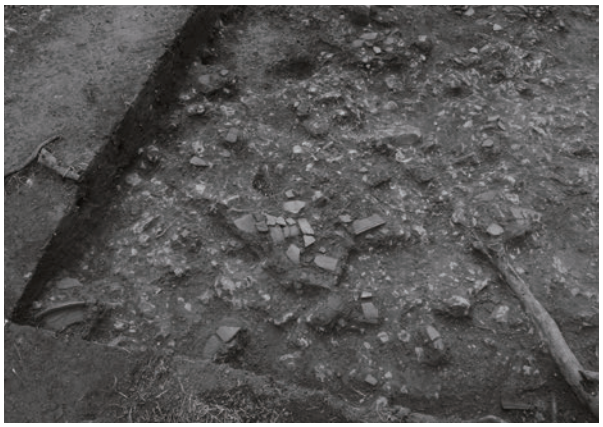
5　17 トレンチ　全景（北西から）

1　17 トレンチ　全景（南西から）

2　17 トレンチ　遺物出土状況 1（南東から）

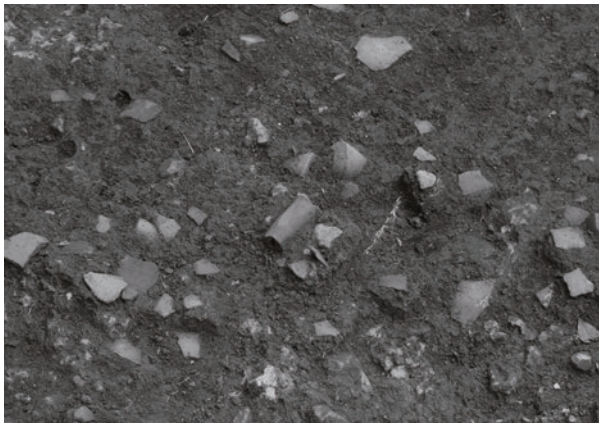
図 版 16

1　17 トレンチ　遺物出土状況 2（西から）



2　17 トレンチ　遺物出土状況 3（南から）

3　17 トレンチ　遺物出土状況 4（東から）

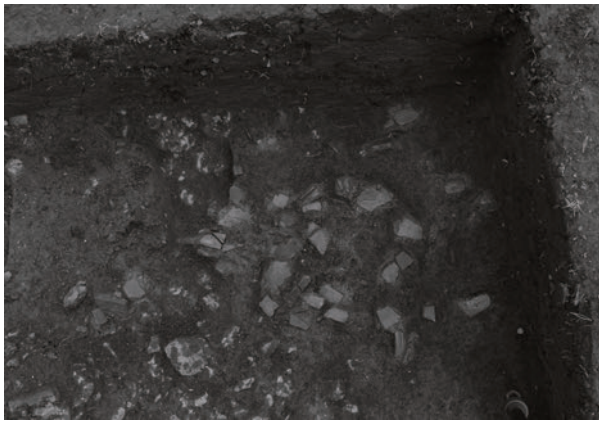


4　17 トレンチ　遺物出土状況 5（東から）

5　17 トレンチ　陥没坑覆土内遺物出土状況 1（南西から）

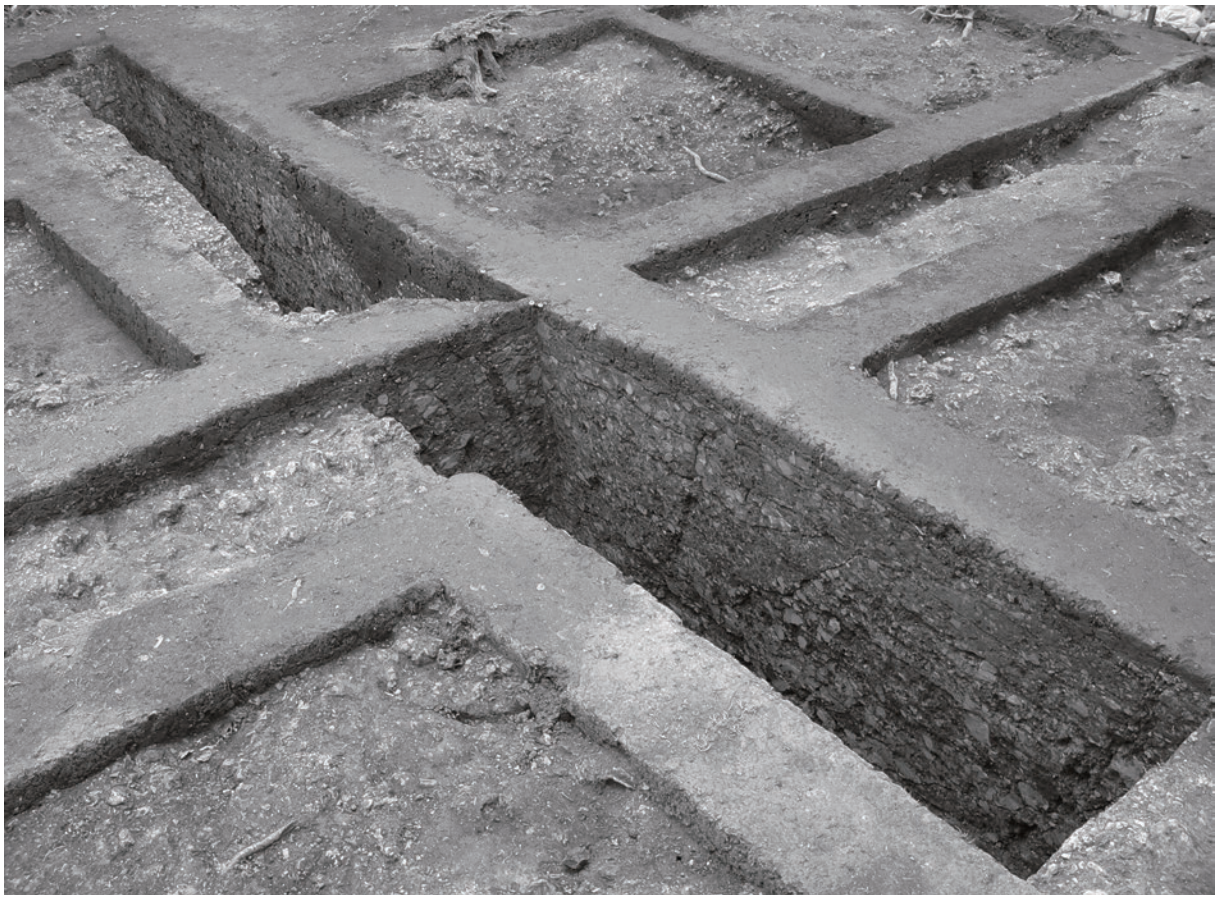
1　17 トレンチ　陥没坑覆土内遺物出土状況２　（南から）

2　17 トレンチ　陥没坑覆土内遺物出土状況３（北西から）



3　17 トレンチ　陥没坑内覆土遺物出土状況４（南東から）

4　17 トレンチ　陥没坑覆土堆積状況（北東から）



5　17 トレンチ　後円部墳頂部盛土断ち割り状況１（北西から）

図 版 18

1　17 トレンチ　後円部墳頂部盛土断ち割り状況２（北西から）

2　17 トレンチ　後円部墳頂部盛土断ち割り状況３（北東から）

3　17 トレンチ　後円部墳頂部盛土断ち割り状況４（南東から）

4　17 トレンチ　後円部墳頂部盛土断ち割り状況５（東から）

5　17 トレンチ　後円部墳頂部盛土（北西から）

1　17 トレンチ　後円部地すべり痕跡確認状況 1（北西から）

2　17 トレンチ　後円部地すべり痕跡確認状況 2（東から）

3　17 トレンチ　粘土槨検出状況 1（南西から）

図版 20

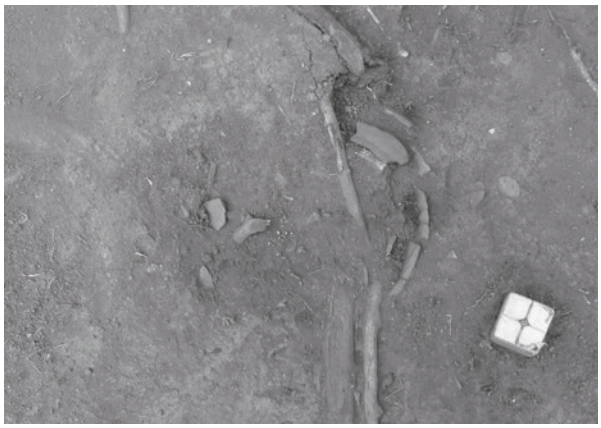
1　17 トレンチ　粘土槨検出状況 2（東から）

2　17 トレンチ　粘土槨検出状況 3（南東から）

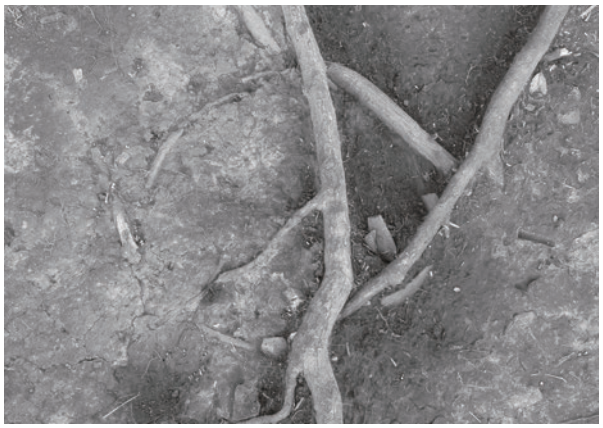
3　18 トレンチ　全景 1（北西から）

4　18 トレンチ　全景 2（西から）

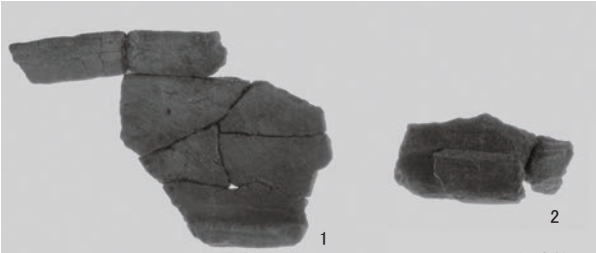
5　18 トレンチ　墳裾検出状況（北東から）



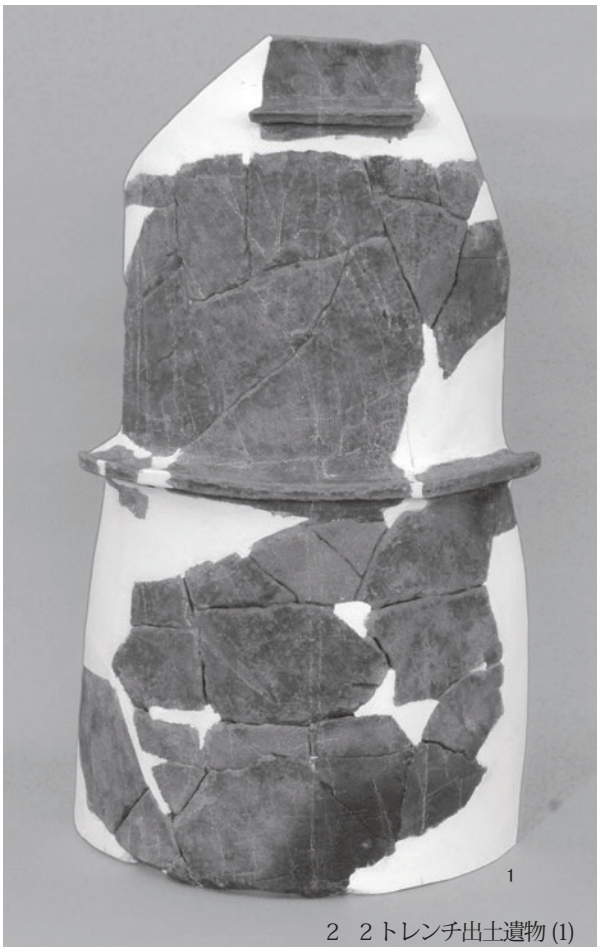
6　後円部墳頂部埴輪列 1（南西から）



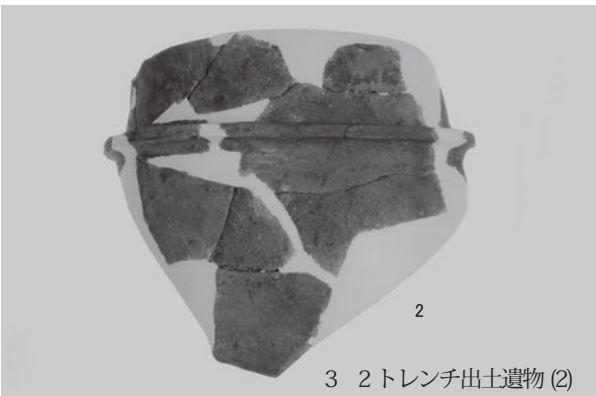
7　後円部墳頂部埴輪列 2（南西から）



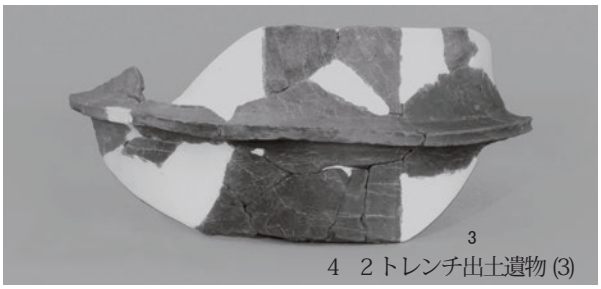
1　1トレンチ出土遺物



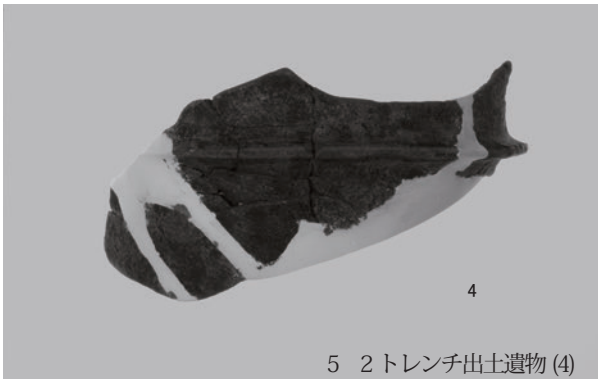
2　2トレンチ出土遺物 (1)



3　2トレンチ出土遺物 (2)



4　2トレンチ出土遺物 (3)



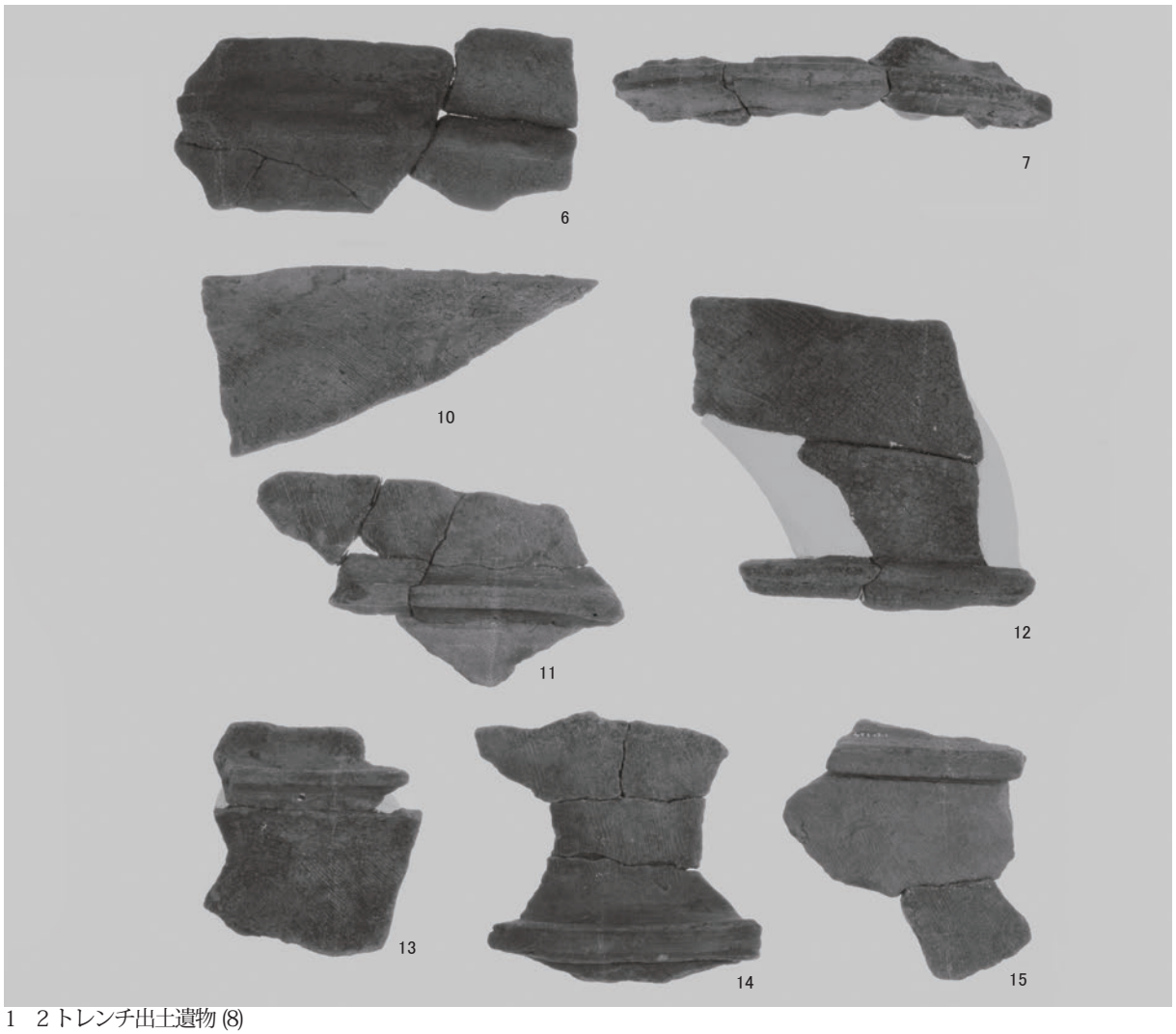
5　2トレンチ出土遺物 (4)

6　2トレンチ出土遺物 (5)

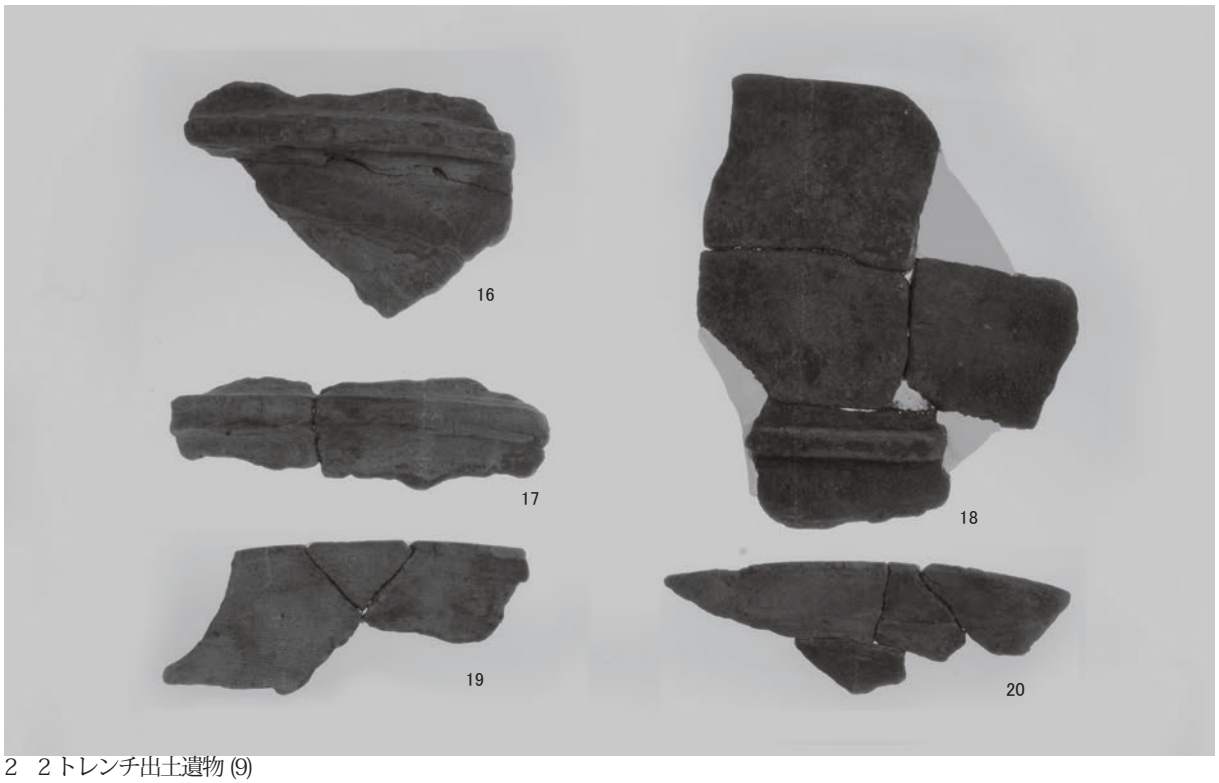
7　2トレンチ出土遺物 (6)

8　2トレンチ出土遺物 (7)

図 版 22

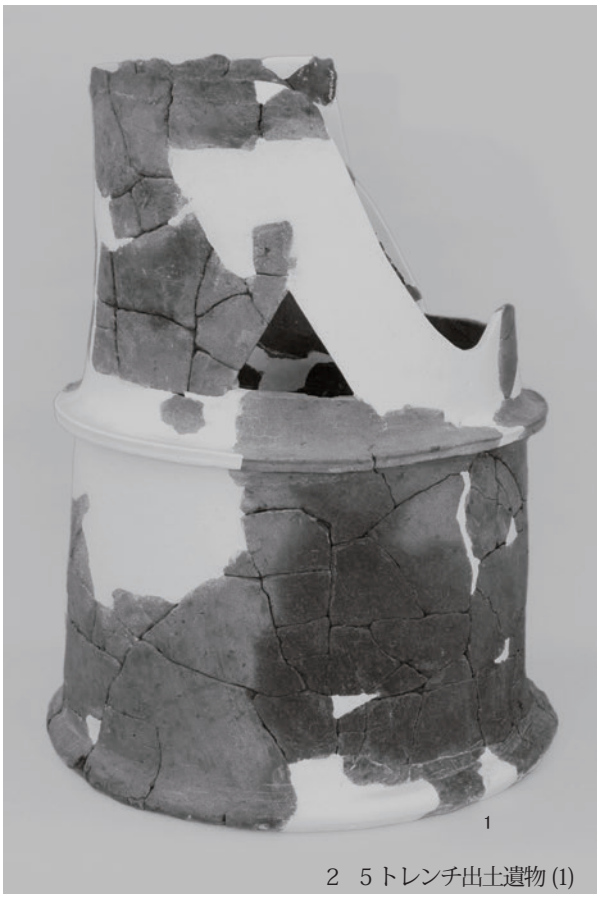


1　2トレンチ出土遺物 (8)

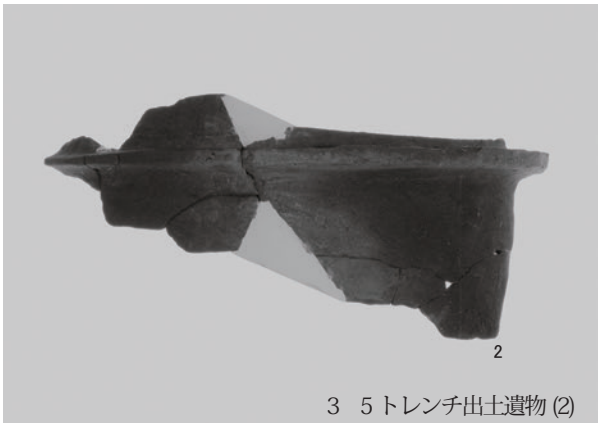


2　2トレンチ出土遺物 (9)

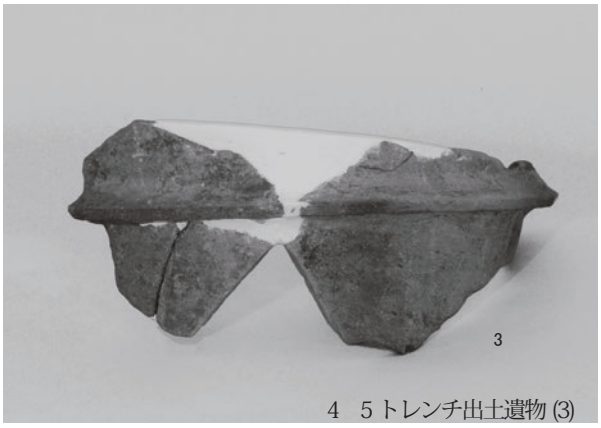
1　3トレンチ出土遺物



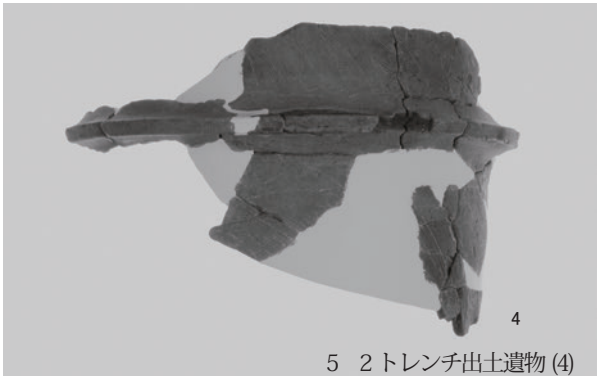
2　5トレンチ出土遺物 (1)



3　5トレンチ出土遺物 (2)

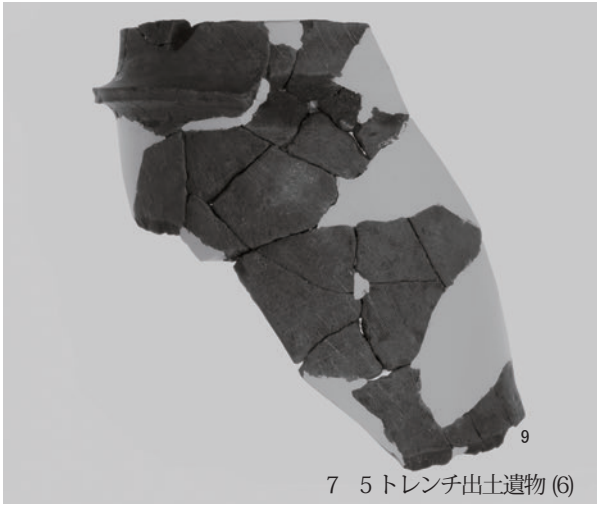


4　5トレンチ出土遺物 (3)



5　2トレンチ出土遺物 (4)

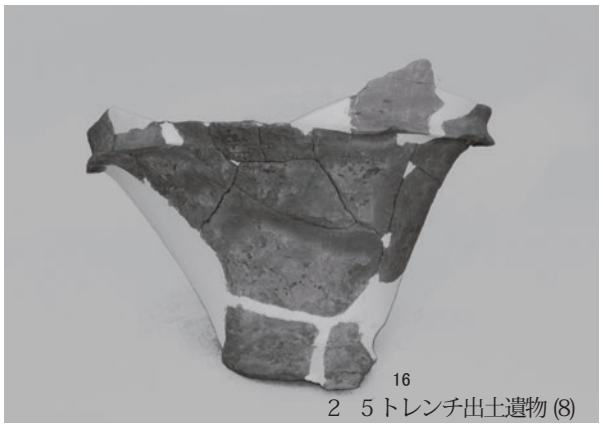
6　5トレンチ出土遺物 (5)



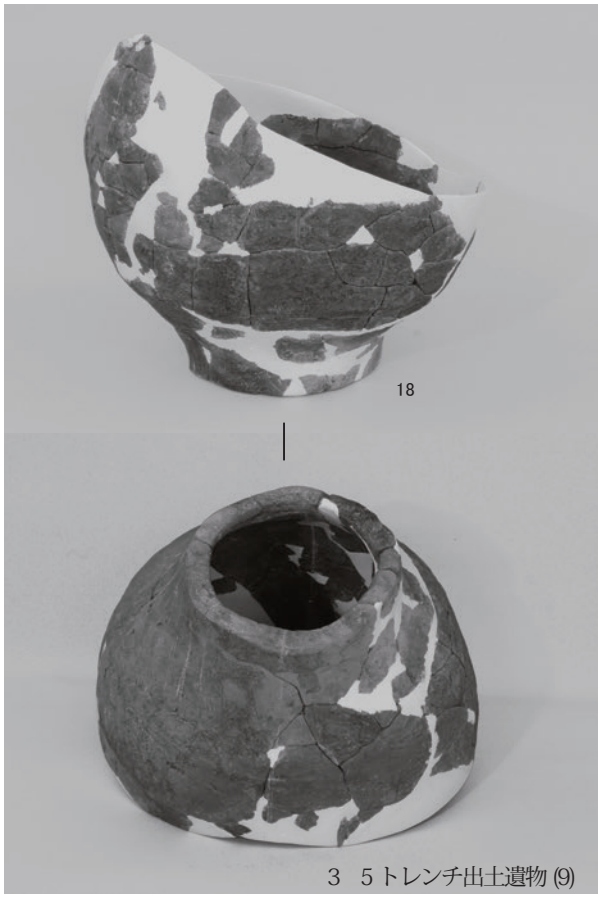
7　5トレンチ出土遺物 (6)

図 版 24

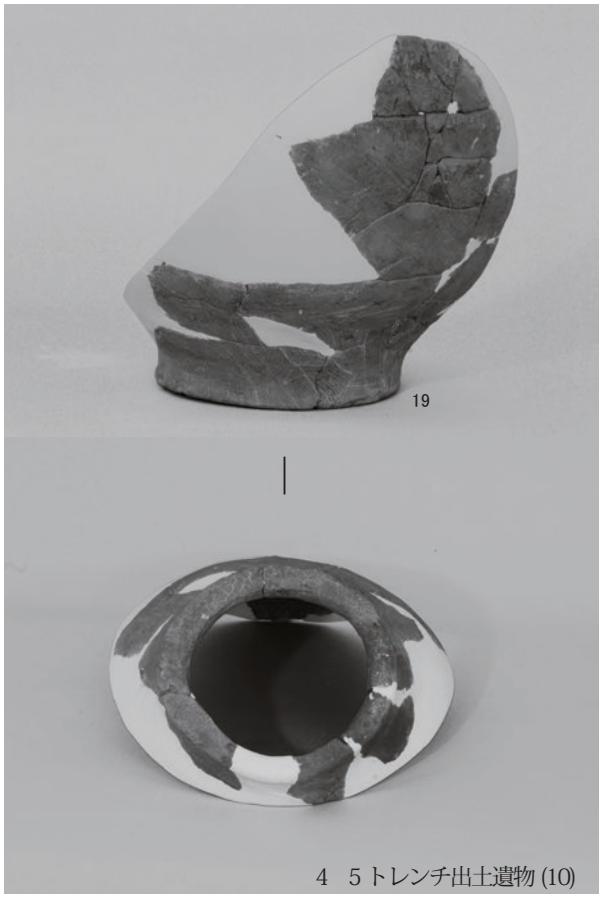
1　5トレンチ出土遺物 (7)



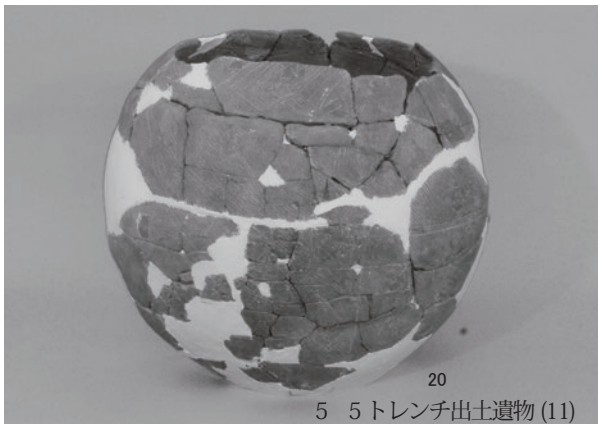
2　5トレンチ出土遺物 (8)



3　5トレンチ出土遺物 (9)



4　5トレンチ出土遺物 (10)



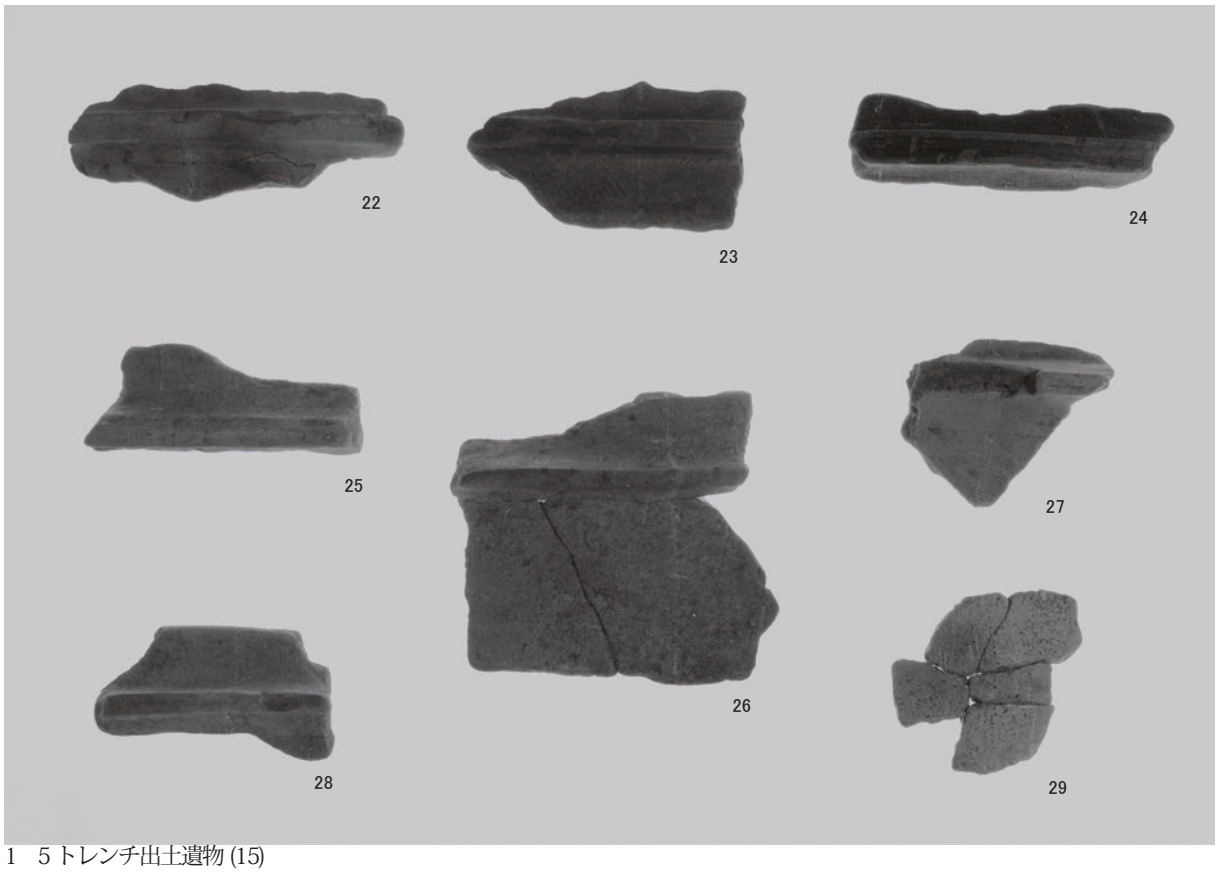
5　5トレンチ出土遺物 (11)

6　5トレンチ出土遺物 (12)

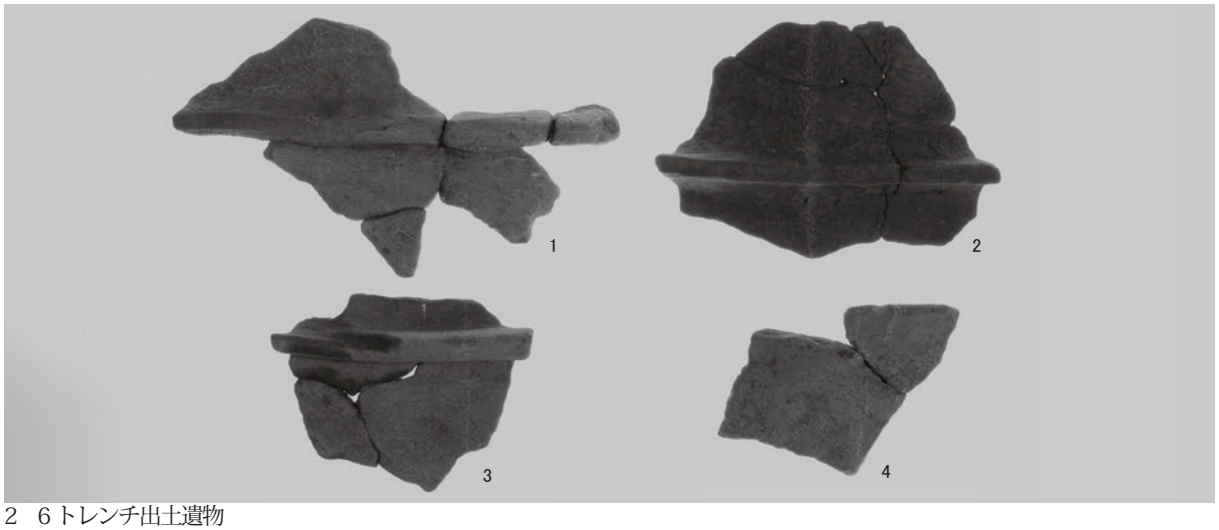
1　5トレンチ出土遺物 (13)

2　5トレンチ出土遺物 (14)

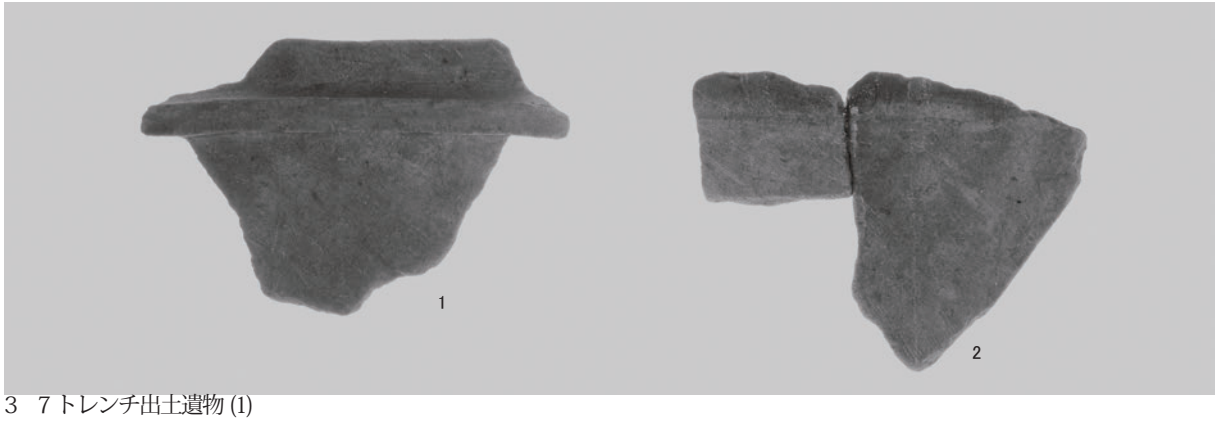
図 版 26



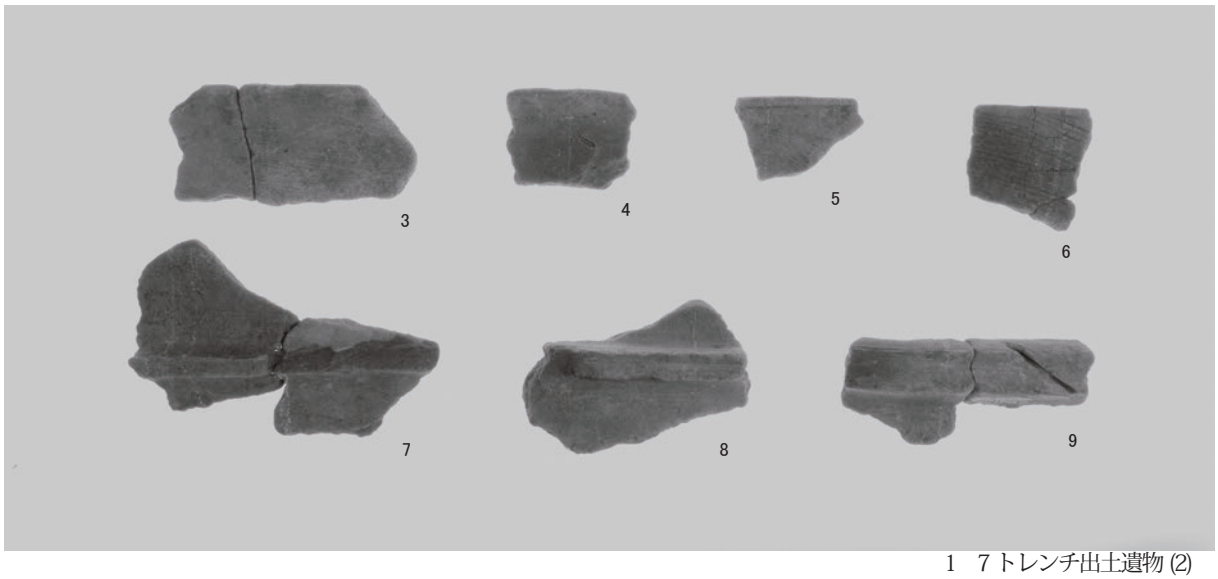
1　5トレンチ出土遺物 (15)



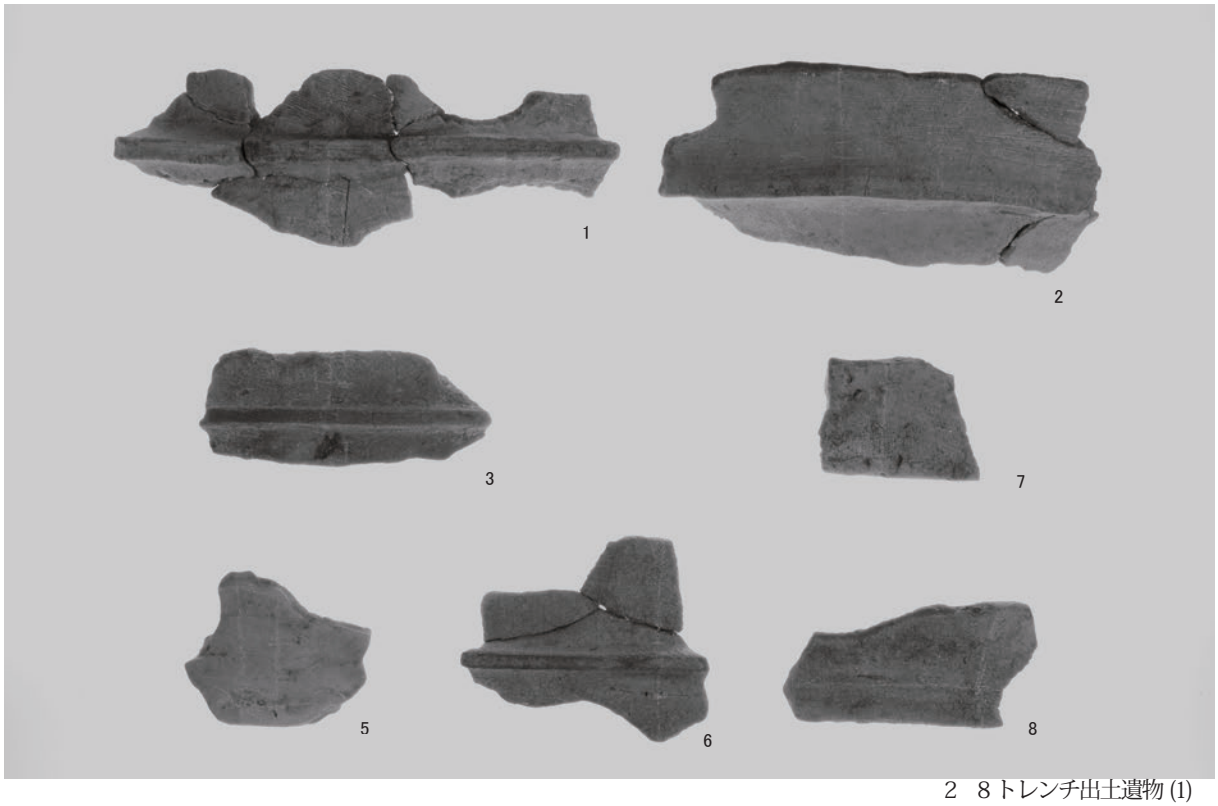
2　6トレンチ出土遺物



3　7トレンチ出土遺物 (1)

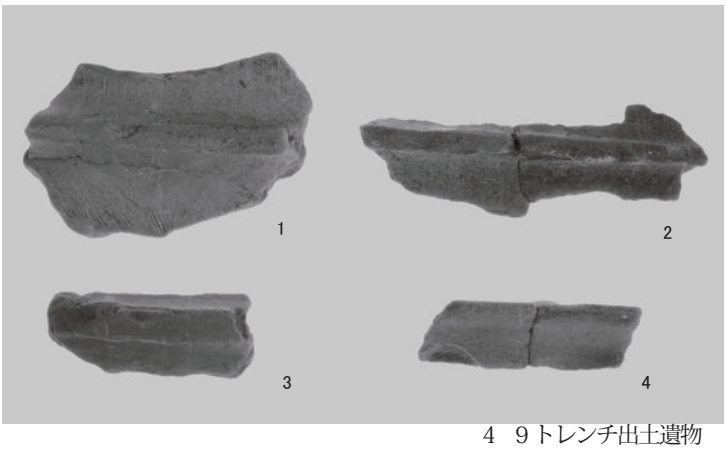


1　7トレンチ出土遺物 (2)



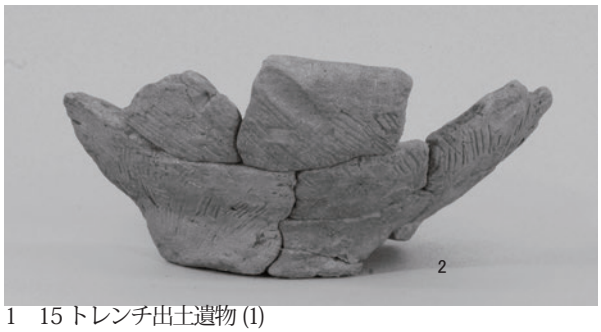
2　8トレンチ出土遺物 (1)

3　8トレンチ出土遺物 (2)

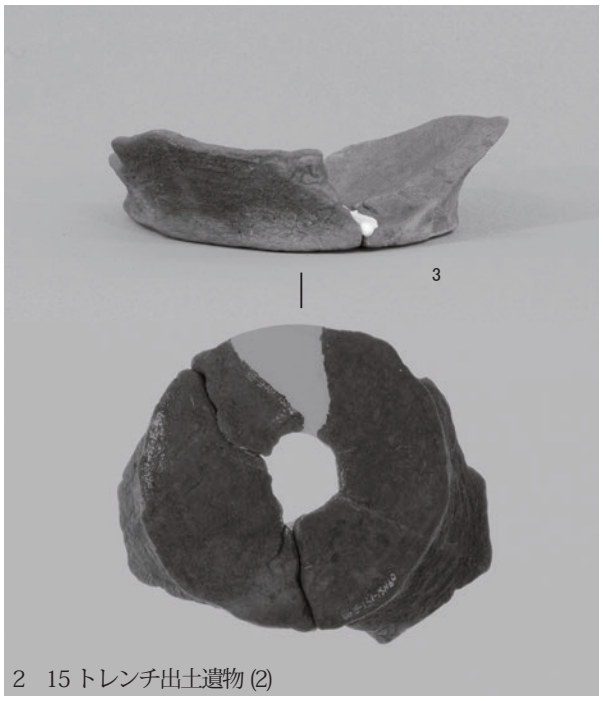


4　9トレンチ出土遺物

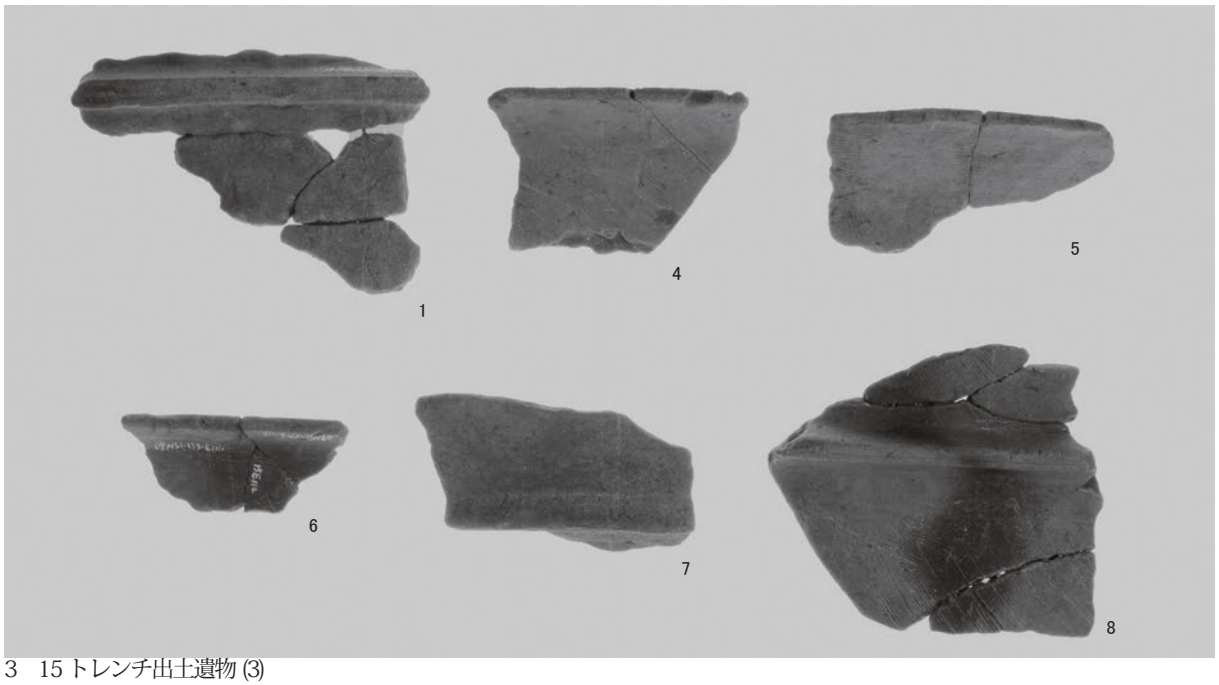
図 版 28



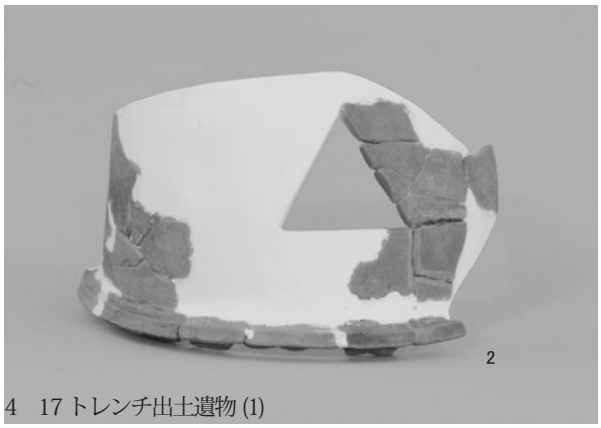
1　15 トレンチ出土遺物 (1)



2　15 トレンチ出土遺物 (2)

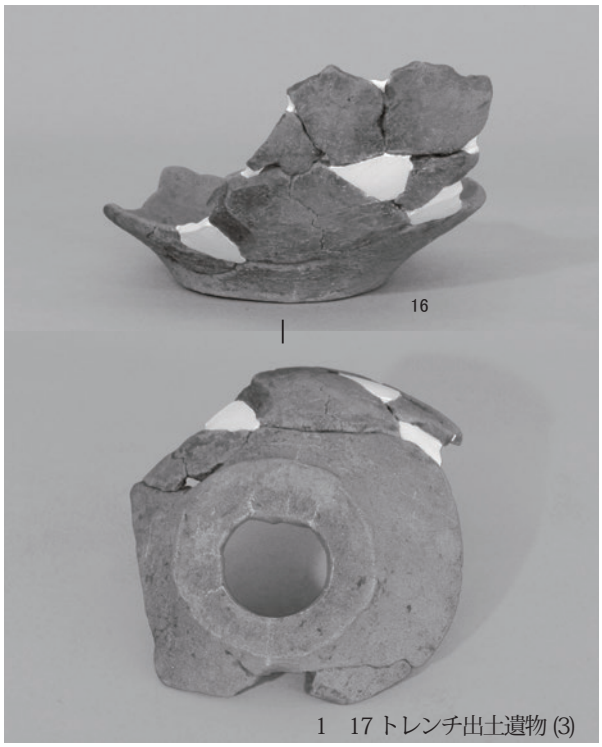


3　15 トレンチ出土遺物 (3)

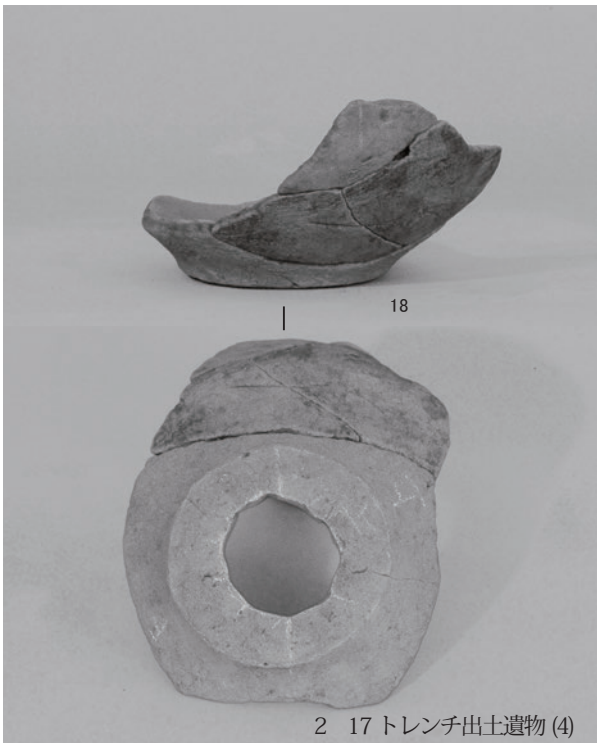


4　17 トレンチ出土遺物 (1)

5　17 トレンチ出土遺物 (2)



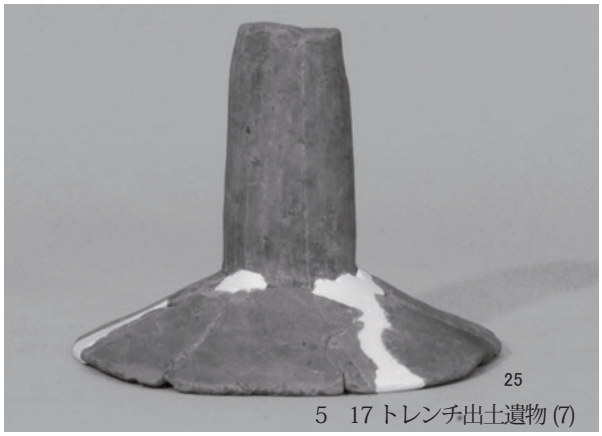
1　17 トレンチ出土遺物 (3)



2　17 トレンチ出土遺物 (4)

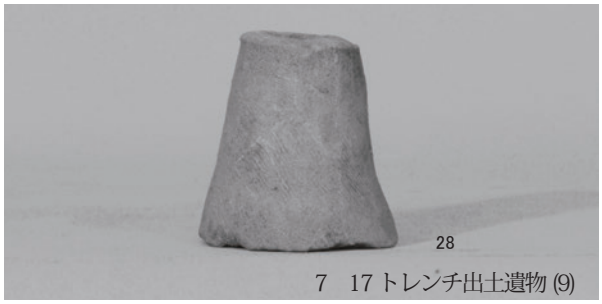
3　17 トレンチ出土遺物 (5)

4　17 トレンチ出土遺物 (6)



5　17 トレンチ出土遺物 (7)

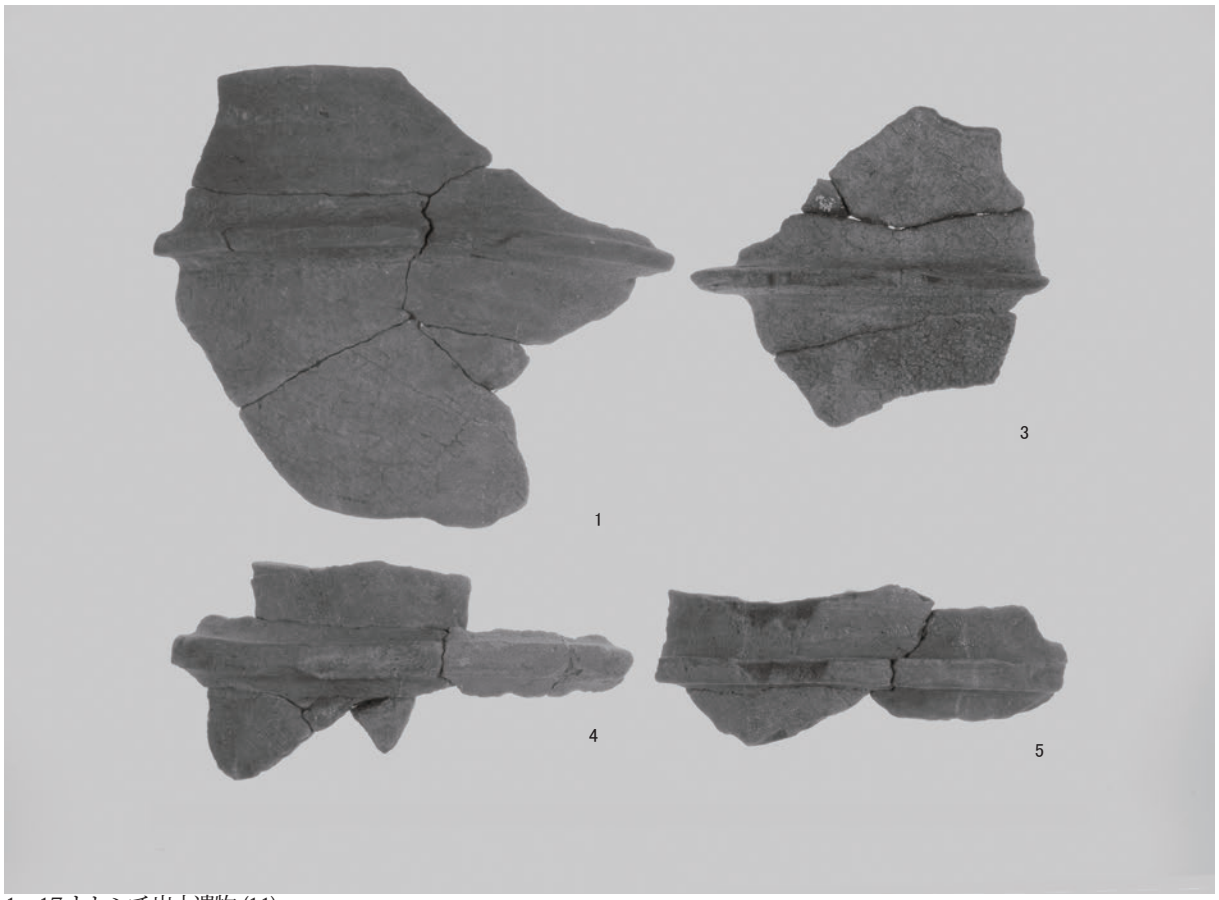
6　17 トレンチ出土遺物 (8)



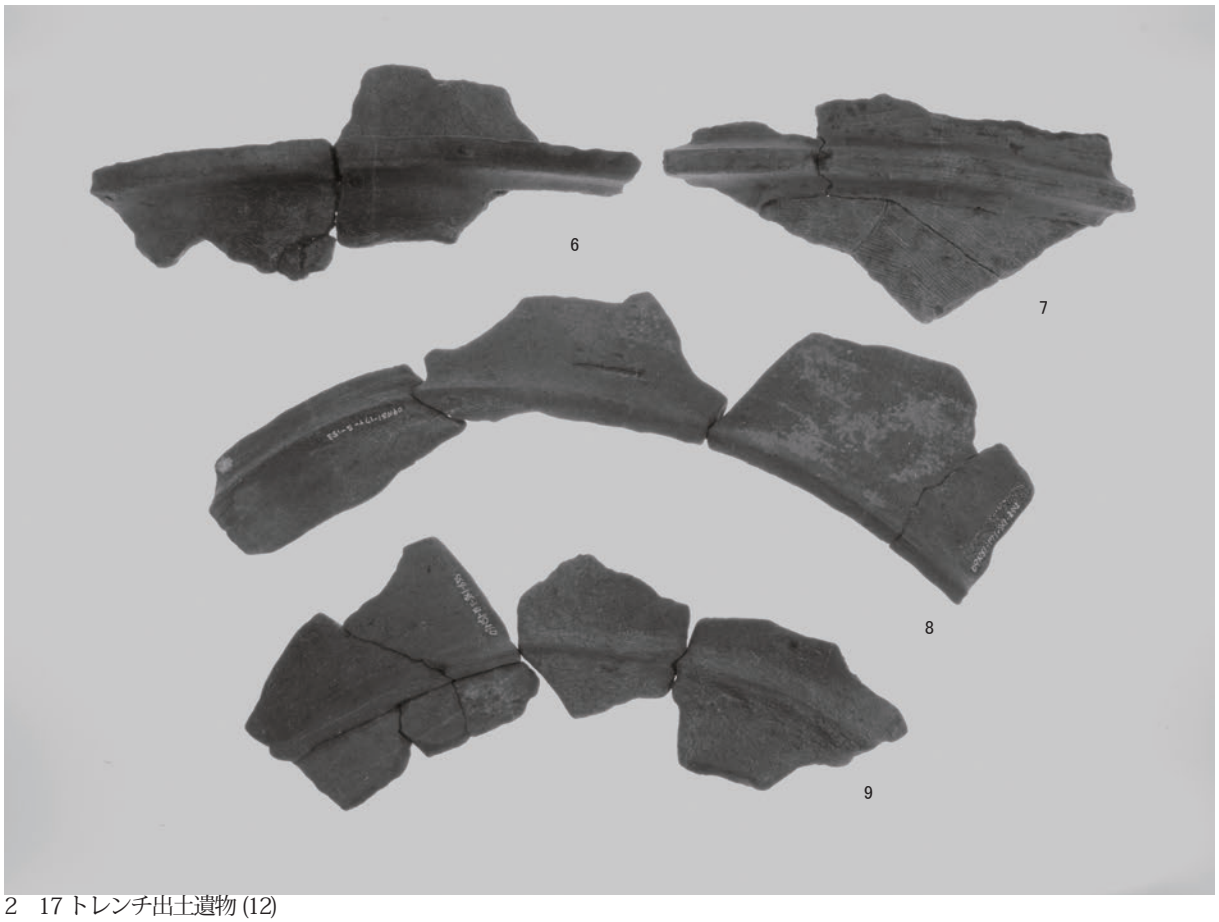
7　17 トレンチ出土遺物 (9)

8　17 トレンチ出土遺物 (10)

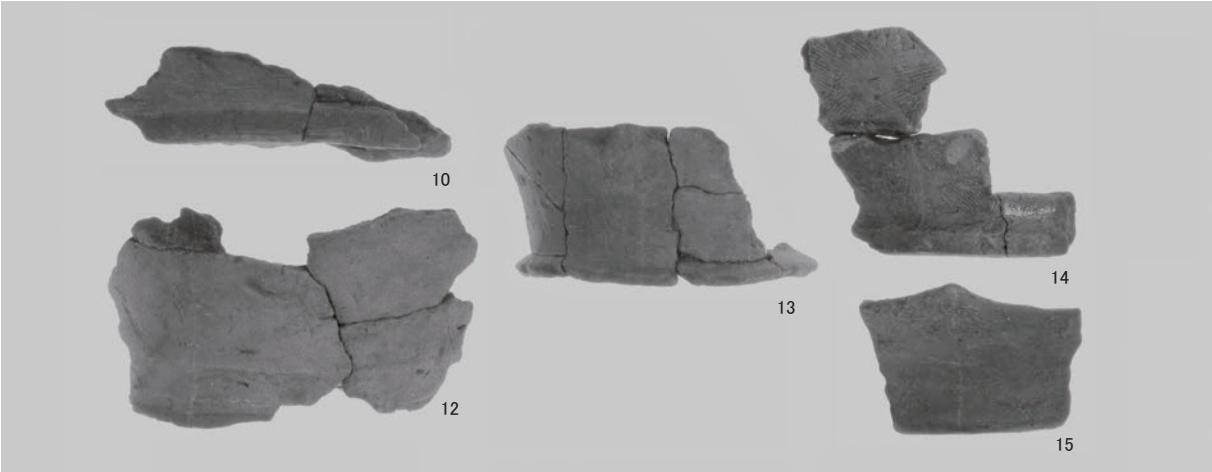
図 版 30



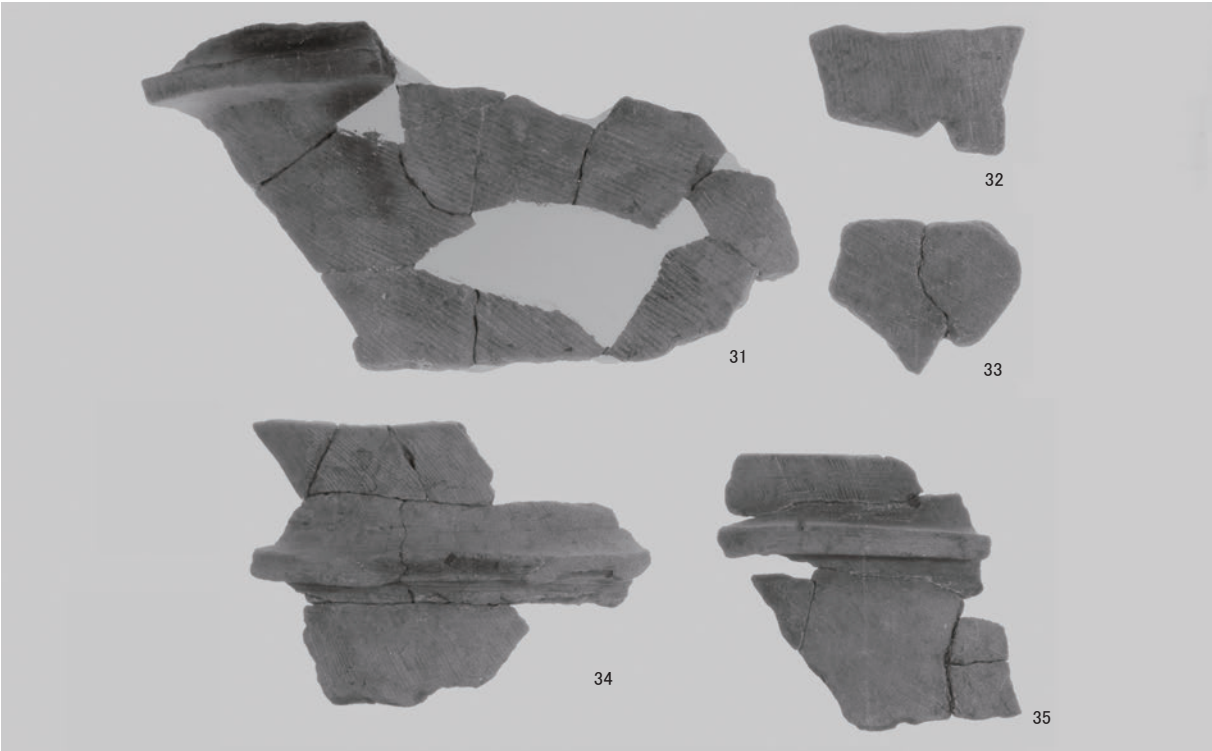
1　17 トレンチ出土遺物 (11)



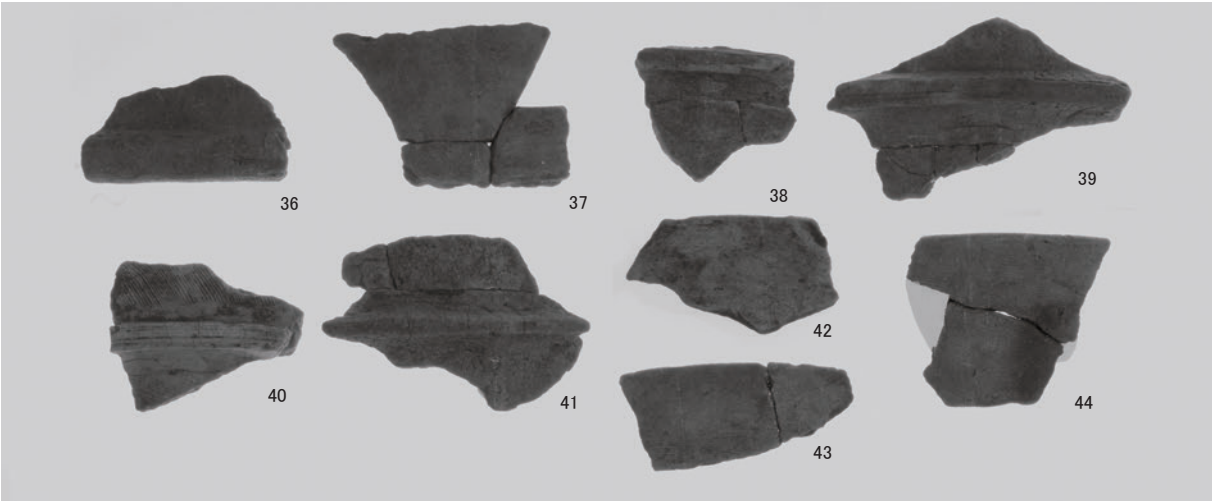
2　17 トレンチ出土遺物 (12)



1　17 トレンチ出土遺物 (13)

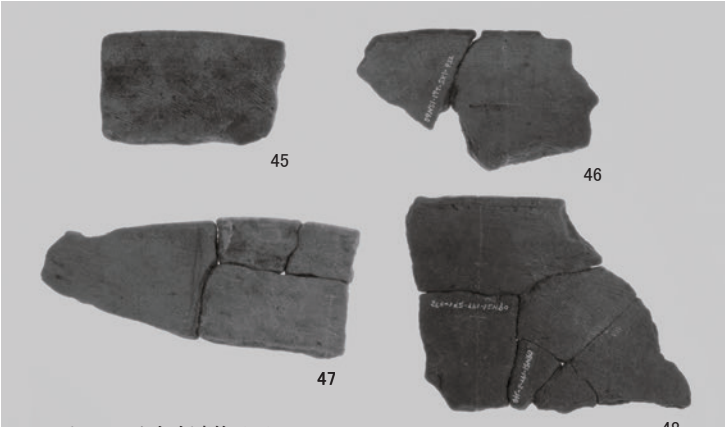


2　17 トレンチ出土遺物 (14)



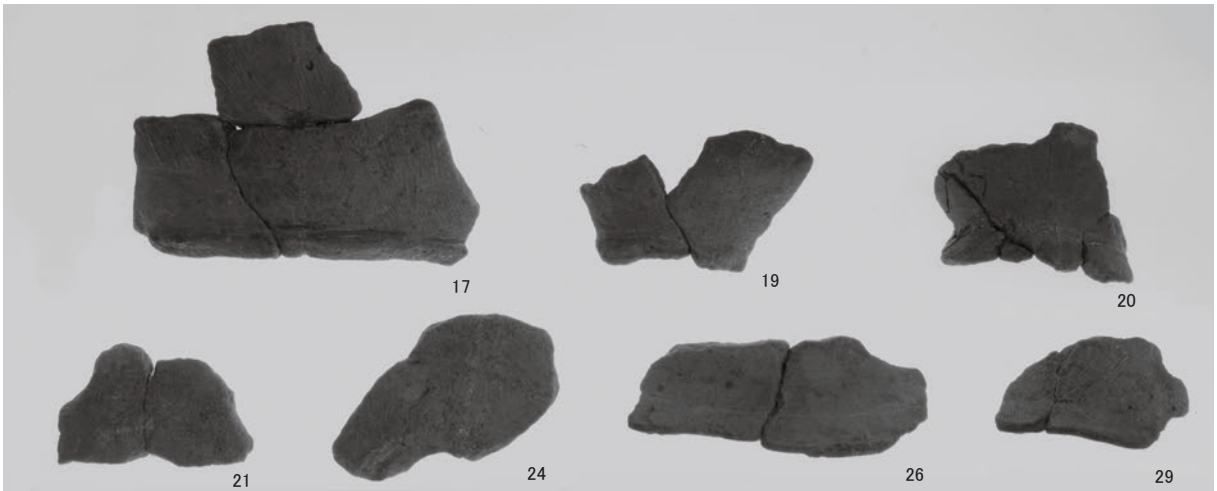
3　17 トレンチ出土遺物 (15)

図 版 32

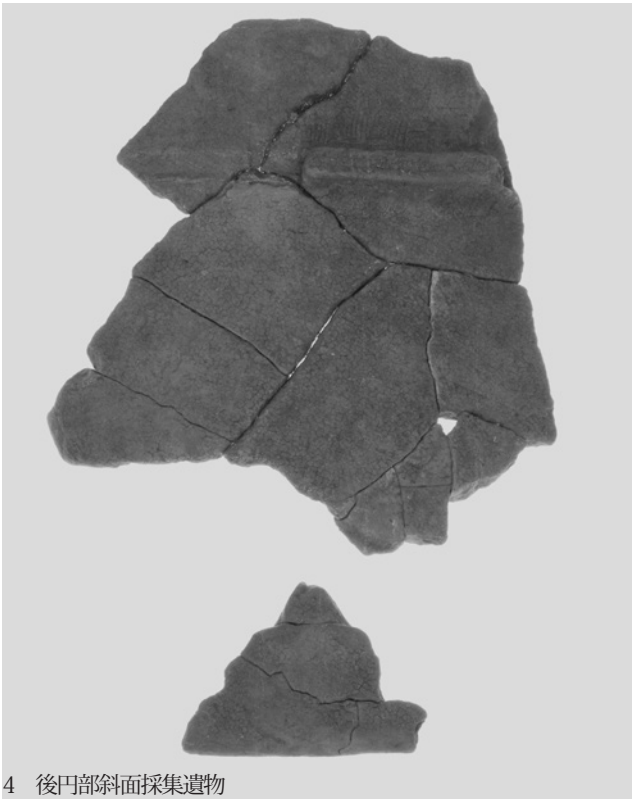


1　17 トレンチ出土遺物 (16)

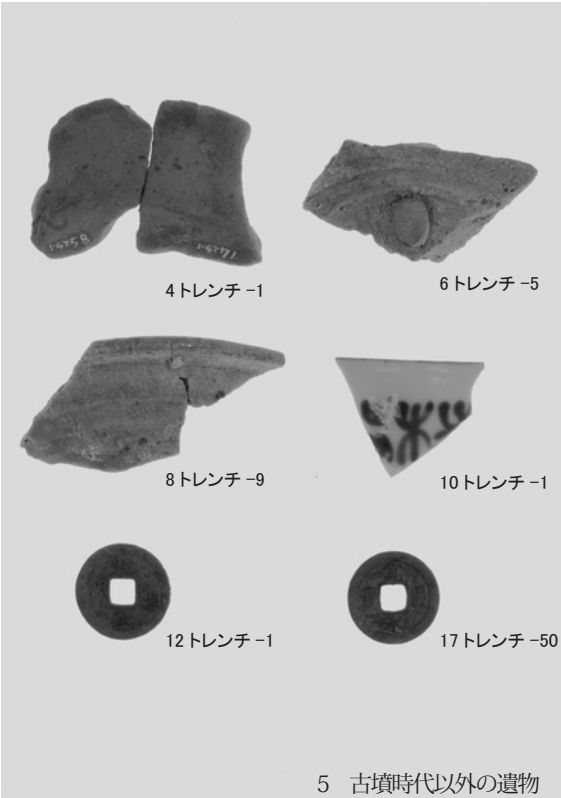
2　17 トレンチ出土遺物 (17)



3　17 トレンチ出土遺物 (18)



4　後円部斜面採集遺物



5　古墳時代以外の遺物

報告書抄録

ふ　り　が　な	くにしていしせきながえさくらやまこふんぐんだいいちごうふんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	国指定史跡長柄桜山古墳群第１号墳発掘調査報告書
副　書　名	
シ リ ー ズ 名	
シ リ ー ズ 番 号	
編　著　者　名	佐藤仁彦・山口正憲
編　集　機　関	逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
所　在　地	〒249-8686　神奈川県逗子市逗子 5-2-16　　TEL　046-873-1111 〒240-0112　神奈川県三浦郡葉山町堀内 2050-9　　TEL　046-876-1111
発　行　機　関	同　上
所　在　地	同　上
発 行 年 月 日	２０１２年３月２１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ながえさくらやまこふんぐん 長柄桜山古墳群 だいいちごうふん 第１号墳	かながわけんずししさくらやま 神奈川県逗子市 桜山７丁目 1839 番２外 かながわけんみうらぐんはやままち 神奈川県三浦郡葉山町 ながえあざよしがくぼ 長柄字芳ケ久保 691 番５外	14208 14301	120 38	35° 17′ 14″	139° 35′ 4″	第３次：20060821 ～ 20061027 第４次：20071203 ～ 20080222 第５次：20080929 ～ 20081219 第６次：20090806 ～ 20091217	第３次： 約 77.7 ㎡ 第４次： 約 121.8 ㎡ 第５次： 約 125.2 ㎡ 第６次： 約 130.7 ㎡	学術調査 （史跡整備に伴う国庫・県費補助事業）

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長柄桜山古墳群 第１号墳	古墳	古墳前期	墳丘（段築、盛土）、埴輪列（５個体分）、主体部（粘土槨）	円筒埴輪、壺形埴輪、土器（高坏、壺、器台）ほか	

要　　約	墳長 90m をはかる、神奈川県下では現存最大級の規模をほこる古墳時代前期後半の前方後円墳の発掘調査である。墳丘は地山削り出し後、盛土を施して構築していることを確認した。後円部三段、前方部二段の段築を有しており、後円部墳頂部縁辺には埴輪列が存在することを確認した。後円部墳頂部中央で陥没坑を発見し、一部を掘り下げたところ直下に粘土槨が存在することを確認した。後円部墳頂部平坦面上からは埋葬儀礼に伴うと思われる高坏、器台、壺などの土器が発見された。

文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用できます。
なお、利用にあたっては出典を明記してください。

平成24年（2012年）3月21日発行

国指定史跡長柄桜山古墳群第１号墳発掘調査報告書

－史跡整備に伴う発掘調査－

発　行　逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
編　集　逗子市教育委員会
〒249-8686　神奈川県逗子市逗子5-2-16
TEL　046-873-1111（代表）
葉山町教育委員会
〒240-0112　神奈川県三浦郡葉山町堀内2050-9
TEL　046-876-1111（代表）
印　刷　有限会社ユニオン印刷